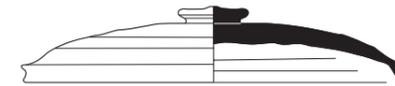


堀遺跡

(第3地点第2次調査)

— 宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —



2011

水戸市教育委員会

堀遺跡

(第3地点第2次調査)

— 宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2011

水戸市教育委員会

ごあいさつ

堀遺跡は、那須茶臼岳^{なすちやうすだけ}を水源とする那珂川下流域右岸の台地上に位置しております奈良・平安時代を中心とした時代の集落遺跡です。当遺跡の周辺には、古代常陸国那賀郡の寺院・官衙遺跡である国指定史跡「台渡里廃寺跡」や県内第3位の規模をもつ前方後円墳である国指定史跡「愛宕山古墳」などが残されており、古くから政治・文化の中心地域であったと考えられます。

歴史的文化的遺産である埋蔵文化財は、工事や開発によって一度破壊されると二度と原状に復すことができないため、私たちが保存しながら後世へと伝えていかなければならない貴重な財産です。しかし近年、都市化の様相が強まる中、当遺跡周辺においても開発が増加し、埋蔵文化財の現状保存は非常に困難になりつつあります。そこで、本市においては、文化財のもつ意義や重要性を踏まえつつ、文化財保護法及び関係法令に基づいた文化財の保護・保存に努めているところです。

このたび、当遺跡内におきまして宅地造成工事が計画されました箇所につきましては、試掘・確認調査の結果、埋蔵文化財への影響が予想されました。そこで文化財保護の観点から事業者と十分な協議を重ねてまいりましたが、現状保存は困難であるとの結論に至ったことから、次善の策として発掘調査を実施し、記録の上での保存措置を講ずることといたしました。

今回の調査により、奈良・平安時代の竪穴建物跡をはじめとする多くの遺構群が確認されました。当遺跡において営まれた奈良・平安時代の集落は、その位置関係やこれまで調査成果を踏まえると、国指定史跡「台渡里廃寺跡」内において営まれた古代寺院・役所の維持・運営に関わる集落であった可能性があり、遺跡自体の性格や当該地域における古代社会の実態を解明していくための貴重な知見を得ることができました。

ここに刊行する本書を、かけがえのない貴重な文化財に対する意識の高揚と学術研究等の資料として、広く御活用いただければ幸いです。

終わりに、本調査にあたり多大な御理解と御協力をいただきました事業者をはじめ、周辺住民の皆様、並びに関係機関の皆様方に心から感謝申し上げます。

平成 23 年 1 月

水戸市教育委員会
教育長 鯨岡 武

目 次

あいさつ 目次 例言 凡例

第1章 調査に至る経緯と経過	1
1-1 調査に至る経緯	1
1-2 発掘作業の経過	2
1-3 整理等作業の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	3
2-1 地理的環境	3
2-2 歴史的環境	3
2-3 掘遺跡における既往の調査	10
第3章 調査の方法と成果	12
3-1 調査の方法	12
3-2 基本土層	12
3-3 遺構	15
3-4 遺物	32
第4章 総括	37
引用・参考文献	39
写真図版	
報告書抄録	

挿図・表目次

第1図 掘遺跡の位置	3	第12図 T-1・2調査区遺構図	25
第2図 掘遺跡と周辺遺跡の位置	4	第13図 T-3・4調査区遺構図	26
第3図 掘遺跡調査地点	10	第14図 T-5・6調査区遺構図	27
第4図 基本土層図	12	第15図 T-7調査区遺構図	29
第5図 調査区の位置	13	第16図 T-8調査区遺構図	30
第6図 調査区方眼図	14	第17図 出土遺物	35
第7図 C-1調査区遺構図(1)	16	第1表 掘遺跡と周辺遺跡一覧	5
第8図 C-1調査区遺構図(2)	17	第2表 ピット一覧	31
第9図 C-1調査区遺構図(3)	17	第3表 出土遺物属性一覧	34
第10図 C-2調査区遺構図(1)	19	第4表 出土遺物計量表	36
第11図 C-2調査区遺構図(2)	20		

図版目次

図版1 C-1・2調査区の遺構調査状況	図版4 T-6～8調査区の遺構調査状況, 基本土層断面
図版2 C-2, T-1調査区の遺構調査状況	
図版3 T-2～6調査区の遺構調査状況	図版5 出土遺物

例 言

1. 本書は、水戸市内に所在する堀遺跡（第3地点）の第2次発掘調査報告書である。
2. 調査は宅地造成工事に伴い、事業者から委託を受けた株式会社東京航業研究所が実施した。
3. 調査は、水戸市教育委員会の指導の下に行った。

所在地 水戸市渡里町字高野台 3231 番外

調査面積 153 m²

調査期間 平成 22 年 1 月 18 日から平成 22 年 1 月 30 日まで

調査担当 渡辺久生（株式会社東京航業研究所文化財調査課）

調査及び整理作業参加者 三浦健 鈴木潤一 小山司農夫 久保木きよ子 河原井俊吉郎

調査体制 水戸市教育委員会（教育長 鯨岡 武）

事務局 内田 秀泰 水戸市教育委員会事務局教育次長

仲田 立 同文化振興課長

中里 誠志郎 同文化振興課長補佐

宮崎 賢司 同文化振興課文化財係長

萩谷 慎一 同文化振興課文化財係主査

関口 慶久 同文化振興課文化財係文化財主事

渥美 賢吾 同文化振興課文化財係文化財主事

金子 千秋 同文化振興課文化財係埋蔵文化財専門員

4. 本書の執筆・編集は渡辺・林・渥美・川口・松浦史昭（上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科特別研究員）が行った。

凡 例

1. 本文中に掲載した実測図の縮尺は、原則として次のとおりである。

全体図 1/200 各区全体図 1/40・1/80 土器等 1/3 金属器 1/3 石製品 1/3

2. 遺構実測図中のレベルは海拔高，方位は座標北を示す。

3. 写真図版は原則として遺物類は 1/3 とした

4. 遺構番号は本文・挿図・写真図版と一致する。

5. 本文で使用した記号等は以下のとおりである。

T…雨水貯留槽を設置予定の調査区 C…道路予定の調査区 SI…住居跡 SK…土坑 P…ピット

遺構図内の遺物出土地点の表示は以下のとおりである。

P…土器 S…石製品 F…金属製品 K…瓦

第1章 調査に至る経緯と経過

1-1 調査に至る経緯

今回の造成工事は平成17年度に計画されたことから、平成17年5月から8月にかけて断続的に試掘・確認調査を実施した。(水戸市教育委員会編2007a) 造成工事は、宅地分譲部分と道路敷設・雨水貯留槽設置部分との二つに分類することができ、このうちの後者については、包蔵される埋蔵文化財への影響から本発掘調査の実施が避けられないことが予想されたことから、その一部については、平成17年度内に大規模な確認調査を実施したところであったが、その後、開発行為に伴う事前協議において事業者と市関係部局との調整が頓挫し、平成17年度の計画は一旦取り下げられた。

平成21年度に至って、開発計画の修正がなされたことから、文化財保護法(以下、「法」という。)第93条第1項の規定に基づき、平成21年10月14日付けで事業者から、茨城県教育委員会(以下、「県教委」という。)教育長あて、宅地造成工事に伴う「埋蔵文化財発掘の届出」が水戸市教育委員会(以下、「市教委」という。)へと提出された。

開発予定地である水戸市堀町字高野台3231番外の地域は、周知の埋蔵文化財包蔵地「堀遺跡」の東端付近に位置し、これまでの調査において周辺には主に奈良・平安時代の集落跡が広がることがわかっていた。工事計画のうち、宅地分譲部分については盛土及び整地工事のみであることから、今回計画の中では直接的な埋蔵文化財への影響は考えられなかったが、道路敷設・雨水貯留槽設置部分については、その工事の性格・内容から計画変更等による遺跡の現状保存が困難であることが明らかであったことから、以下のような分類による取扱いが相当であるとして、市教委から県教委へ意見書を付して届出を進達した(平成21年11月4日付け教文第881号)。すなわち、

(1) 既調査の道路敷設部分：平成17年度における詳細な確認調査の内容・結果が、ほぼ記録保存に相当するため、本発掘調査が重複することを避けること。

(2) 未調査の道路敷設部分及び雨水貯留槽埋設箇所：埋蔵文化財に著しい影響を与えることから本発掘調査が相当であること。ただし、すでに近隣住民の生活道路の一部となっている箇所については、既設管の攪乱が著しく、埋蔵文化財の遺存する可能性が低いことから、水戸市教育委員会専門職員による工事立会として本発掘調査の対象から除外すること。

意見書の内容を踏まえた上で、県教委教育長から平成21年12月14日付け文第1609号にて、遺構等が損壊されるなど埋蔵文化財の保存に影響がある箇所について工事着手前に発掘調査を実施すること、また調査の結果重要な遺構等が発見された場合には、その保存等について別途協議を要する旨勧告があった。

これを受けて、事業者は株式会社東京航業研究所(以下、「受託業者」という。)と発掘調査業務の委託契約を締結し、この契約に基づき、受託業者から平成21年12月15日付けで法第92条第1項に規定する「埋蔵文化財発掘調査の届出」が提出された。本発掘調査の現地調査はこの届出に基づき、平成22年1月18日から平成22年1月30日まで、市教委の指導・助言の下、実施することとなった。

(渥美)

1-2 発掘作業の経過

現地作業は、平成22年1月18日から平成22年1月30日までの2週間実施した。整理作業は平成22年2月8日から平成22年2月26日まで行った。作業経過の概略は次のとおりである。

平成22年1月12日に、調査区域の周辺住民に「発掘調査着手」のお知らせを行った。

1月15・16日 調査区設定作業を行った。調査区は、造成に伴う道路予定地2箇所、雨水貯水槽設置予定地8箇所の計10箇所である。8箇所ある雨水貯水槽予定地は北側から反時計回りに「T-1……8」、2箇所ある道路予定地の調査区中央部を「C-1」、調査区東側を「C-2」とそれぞれ呼称することとした。

1月18日 表土掘削作業に着手した。表土掘削は調査区内に残土山があり、その撤去に時間を要し2日間を要した。遺構確認作業は、表土掘削が終了した調査区から順次実施した。

1月19日 遺構確認作業は、調査区C-2・T-8を除き完了した。C-2とT-8はその大半が日照がなく、霜等が融けることがないため調査の最後に集中して行うことが最善の方法であると判断した。調査区T-1～7・C-1からの検出遺構は少なく、T-6から住居跡1軒（T-6 SI01号住居跡）、他の調査区からはピット46基を確認した。T-6 SI01号住居跡は、堀遺跡第3地点第1次調査（平成17年8月）において確認された006号遺構と同一住居跡である。

1月20日 T-1からT-6・C-1調査区まで順次遺構の発掘作業に着手した。作業は検出遺構が少ないこともあり、順調に進む。

1月21日 T-6 SI01住居跡の調査に着手した。須恵器蓋や砥石・鉄製品等が出土した。

1月22日 各調査区の土層、遺構の土層等の実測作業を行った。

1月23日 T-1～6とC-1調査区の発掘作業は、C-1調査区の一部作業を除き終了した。

1月25日 T-8調査区の住居跡1軒（T-8・SI01号住居跡）、C-2調査区のピット群の調査に着手した。

1月27日 C-2調査区ピット調査、T-8・SI01床面上の粘土（竈からの流出か）の掘削、遺構及び調査区の土層断面図の実測作業を行った。

1月28日 基本土層の実測作業等を行った。各調査区の遺構調査はほぼ完了した。

1月29日 各調査区の遺構調査及び写真測量を行い、水戸市教育委員会の調査完了確認を受けた。

1月30日 各調査区の埋め戻し作業を行い、全ての発掘作業が完了した。（渡辺）

1-3 整理等作業の経過

整理作業は、平成22年2月4日より2月26日にかけて行った。

2月4日～12日の整理作業は、遺物の水洗い、注記、接合と並行して、写真測量を行った遺構の図化作業をSTP（デジタル図化解析機）である。

2月14日～26日には遺構図版の校正・トレース、遺物の実測・トレース、遺物写真の撮影、図版の作成、原稿執筆等を行った。（渡辺）

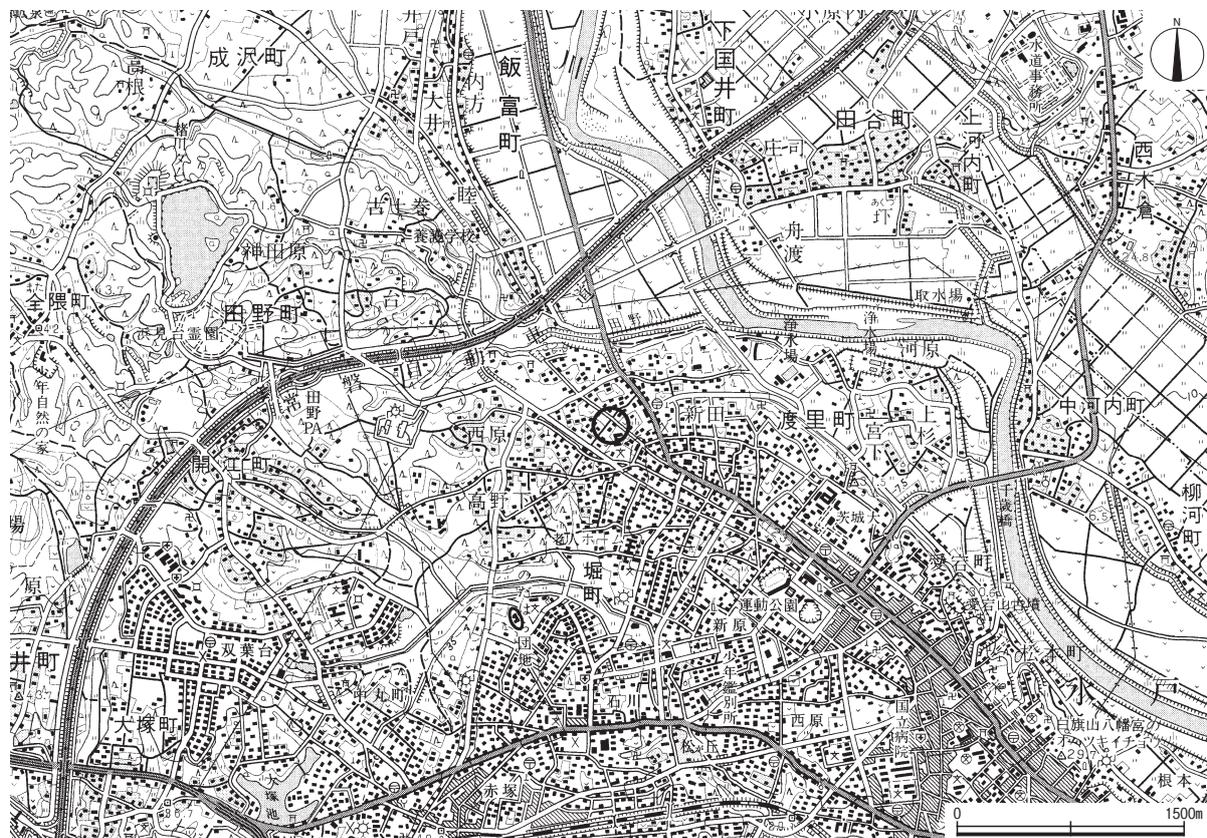
第2章 遺跡の位置と環境

2-1 地理的環境

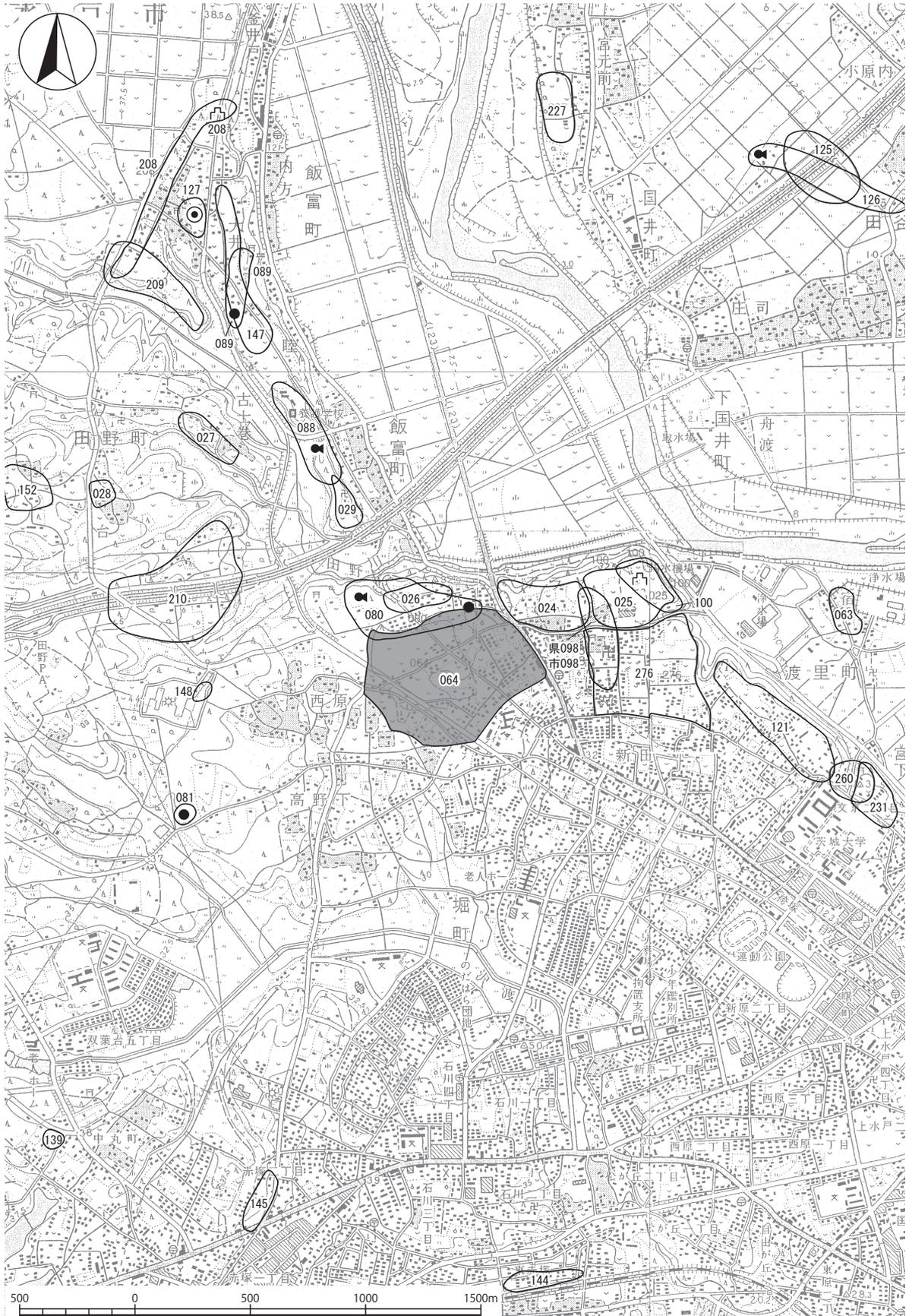
堀遺跡の立地する水戸市堀地区は、市域の北西部に位置し、北を那珂川に、南を桜川に挟まれた通称「上市台地」と呼ばれる那珂川によって形成された河岸段丘上に位置している。遺跡は、南流する那珂川が東流してきた田野川と合流し、東の方向へと蛇行していくその合流点から、南西方向に約1.0 km入った地点である（第1図）。那珂川沿いの沖積低地との比高は約30mである。今回の発掘地点（第3地点2次）は、那珂川と田野川の合流点から南西に約1 kmの台地上を、北西から南東に走る国道123号線の西に位置し、田野川の崖線からは、南に500 m程の距離になる（第1図）。（松浦）

2-2 歴史的環境

堀遺跡は、国指定史跡「台渡里廃寺跡」の西方500 m、那珂川の支流田野川から南に600 mの標高31～34mの台地上に広がっており、その範囲は東西750m、南北630mにも及ぶ（第2図）。戦前および昭和20年代にはこの一帯に畑地が広がっており、所々に雑木林が残っていたが、昭和40年代の後半から徐々に宅地化が進み、往時の景観が失われつつある。堀遺跡が立地する那珂川流域の台地上には先土器時代から近代に至るまでの多数の集落跡と古墳・横穴、寺院跡・官衙跡、城館跡が確認されている（第2図、第1表）。以下では周辺の先土器時代～中・近世遺跡を概観する。（松浦）



第1図 堀遺跡の位置（国土地理院発行1：50,000「水戸」に加筆）



第2図 堀遺跡と周辺遺跡の位置 (国土地理院地形図1:25,000「水戸」 「石塚」に加筆)

第1表 堀遺跡と周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	種別	遺物	備考
22	愛宕町遺跡	集落跡	縄文土器(早～後)・石斧・石錘・土偶, 弥生土器(後), 土師器(古)・須恵器(古)	
23	文京1丁目遺跡	集落跡	縄文土器(早～後)・石斧・石剣・土偶, 弥生土器(後), 土師器(古前)・須恵器	
24	アラヤ遺跡	集落跡	尖頭器(先), 縄文土器(早～晩)・石斧・石剣・土偶, 土師器(古・奈・平), 須恵器(奈・平)	S26年, H1年, H18年調査
25	長者山遺跡	集落跡	縄文土器(早～後), 弥生土器(後), 土師器(古・奈・平)	
26	西原遺跡	集落跡	縄文土器(早～後), 土師器(奈・平), 須恵器(奈・平)	
37	阿川遺跡	集落跡	縄文土器(中～後), 土師器(古), 土師器(奈・平)	
38	梵天遺跡	集落跡	縄文土器(早～後), 弥生土器(後), 土師器(古前・後)	
39	権現山遺跡	集落跡	縄文土器(前), 弥生土器(後), 土師器(古前・後)	
40	平塚遺跡	集落跡	縄文土器(中～晩)・石錘・土偶, 弥生土器(後), 土師器(古), 須恵器	
46	軍民坂遺跡	集落跡	搔器(先), 縄文土器(前～後)・土器片・石製品, 弥生土器(後), 土師器(奈・平)・須恵器(奈・平)	H17年度
47	富士山遺跡	集落跡	弥生土器(後), 土師器(古), 須恵器	
48	小原内遺跡	集落跡	縄文土器(中～後), 弥生土器(後), 土師器(古), 土師器(奈・平)	
63	坪渡里遺跡	集落跡	土師器(古・奈・平)・須恵器(古・奈・平)	
64	堀遺跡	集落跡	弥生土器(後), 土師器(古前・奈・平)・須恵器(奈・平)・灰釉陶器(奈良・平安)・紡錘車・砥石・鉄製品(鎌・鎌・刀子・釘)・瓦, 内耳土器(中)・土師質土器(中)・常滑焼(中)・播り鉢(中)・石臼, 瓦質土器(近)・磁器(近)	H5年, H6年度調査
65	中河内遺跡	集落跡	土師器(奈・平)	古墳(前)
79	愛宕山古墳群	古墳群	円筒埴輪・形象埴輪・鉄刀(古)	前方後円墳1(2), 円墳1(2)
80	西原古墳群	古墳群	土師器(古)・円筒埴輪(古)・須恵器・勾玉・管玉・丸玉・甗玉・銅環・鉄鎌(古)	H17年, H18年度調査, 前方後円墳1, 円墳8(11)
94	権現山古墳群	古墳群		円墳1(2)
95	権現山横穴群	横穴群	土師器(古)・須恵器(古)・水晶製切子玉・ガラス製小玉(古)	横穴墓0(4)?
96	富士山古墳群	古墳群	土師器(古)・円筒埴輪・人物埴輪(古)	前方後円墳1(?), 円墳8
97	小原内古墳群	古墳群	円筒埴輪・形象埴輪・直刀(古)	前方後円墳1, 円墳2(4)
98	台渡里廃寺跡	寺院跡/官衙跡	ナイフ形石器・男女倉型有極尖頭器・剥片(先), 縄文土器(前・後～晩)・石器, 弥生土器(後), 土師器(奈・平)・須恵器(奈・平)・墨書土器・平瓦・丸瓦・軒丸瓦・軒平瓦・殿斗瓦・面戸瓦・隅切り瓦・文字瓦・瓦塔・陶製相輪・金箔製品・鉄製品(釘・鏝)・青銅製品・鉄滓・羽口, カワラケ(中)・内耳土器(中)	S14～S19年, S46～S49年, H6年, H9～H10, H12～H18年度調査
99	田谷廃寺跡	寺院跡/官衙跡	土師器(奈・平)・須恵器(奈・平)・平瓦・丸瓦・軒丸瓦・軒平瓦・文字瓦(奈・平)	
100	長者山城跡	城館跡		H18年度調査, 土塁と堀が良好な状態で遺存
121	渡里町遺跡	城館跡	縄文土器(早・中・後), 土師器(古・奈・平)・須恵器(奈・平)・灰釉陶器(奈・平)	H15年, H16年度調査
125	塚宮遺跡	集落跡	縄文土器(中・後), 弥生土器(後), 土師器(古前・後)	
126	塚宮古墳群	古墳群		前方後円墳0(1), 円墳0(2), 湮滅
224	砂川遺跡	集落跡	縄文土器(中・後), 土師器(奈・平)・須恵器(奈・平)・石製品・土製品・鉄製品・木製品・軒平瓦(奈・平)	S55年度調査
225	白石遺跡	城館跡/集落跡	角錐状石器(先)・削器(先), 尖頭器(草創)・有舌尖頭器(草創)・石鏃(草創), 縄文土器(中), 弥生土器(後), 土師器(古・奈・平), 須恵器(古・奈・平), 内耳土器(中)・陶器(中)・磁器(中)	H2～3年度調査
226	白石古墳群	古墳群		円墳5
227	宮元遺跡	集落跡	土師器(古前)	
228	上河内大塚古墳	古墳	土師器(奈・平)・須恵器(奈・平)	
229	一本松古墳	古墳	直刀	円墳0(1), 湮滅
230	笠原神社古墳	古墳	縄文土器(後), 土師器(古), 陶器	円墳1(3)
231	文京2丁目遺跡	集落跡	弥生土器(後), 土師器(古・奈・平), 須恵器(奈・平)	
232	中河内館跡	城館跡		
276	台渡里遺跡	集落跡	縄文土器(晩), 土師器(古・奈・平)・須恵器(古・奈・平)・墨書土器(奈)・炭化米(奈・平)・軒平瓦・平瓦・鉄製刀子(古)・鉄製鎌(古)・砥石(古), 内耳土器(中), 陶器(近)・磁器(近)・銅銭(近)・銅製箸(近)・砥石(近)	H6年, H8年, H14～H19年度調査

(井上・蓼沼・仁平・根本) 1998に加筆

(1) 先土器時代～縄文時代草創期

堀遺跡からは当該期の遺構・遺物は確認されていないが、台渡里廃寺跡やアラヤ遺跡、那珂川を挟んだ対岸の軍民坂遺跡と白石遺跡から、先土器時代～縄文時代草創期の石器が出土している。軍民坂遺跡からは、石刃製の搔器が採集され(吹野・江幡 1998)、平成2～3年にかけて実施された白石遺跡の発掘調査では頁岩製の角錐状石器や時期不明の削器と剥片(いずれもメノウ製)、尖頭器(頁岩製)、縄文時代草創期の有舌尖頭器(黒曜石製・頁岩製)・石鏃(ガラス質黒色安山岩製・頁岩製)が出土している(檜村 1993)。

台渡里廃寺跡からは、平成16年度に行われた確認調査で、南方地区の塔跡における基壇の断ち割り調査の際に掘り込み地形の基底部直下のローム層から出土したメノウの剥片、平成16年度調査南方地区第2トレンチ(DWT04N-T2)から出土した硬質頁岩製の男女倉型有樋尖頭器、平成18年度調査長者山地区正倉院区画溝確認トレンチからチャート製の二側縁加工のナイフ形石器が出土している。また、アラヤ遺跡では硬質頁岩及びガラス質黒色安山岩製の槍先形尖頭器が各1点出土している。

しかしながら、ほとんどの資料が後世の遺構内覆土出土資料や、単独出土品であることから、どのような土地利用が展開していたのかについて定かではない。今後は、調査時の偶然の発見に委ねるのではなく、最終氷期人類の具体的な活動内容を探るために石器集中地点や礫群、炉跡等の遺構の確認を目的としたローム層内の調査事例を積極的に増やしていく必要があるだろう。(川口)

(2) 縄文時代

縄文時代の遺跡は、愛宕町遺跡、文京1丁目遺跡、アラヤ遺跡、長者山遺跡、西原遺跡、阿川遺跡、梵天遺跡、権現山遺跡、平塚遺跡、軍民坂遺跡、小原内遺跡、渡里町遺跡、塚宮遺跡、砂川遺跡、白石遺跡、笠原神社古墳が該当する。これらのうち発掘調査が行われているのは、アラヤ遺跡、砂川遺跡、軍民坂遺跡、白石遺跡のみであり、他の遺跡はすべて踏査により確認されている。

アラヤ遺跡は昭和26年と平成元年、平成18年に発掘調査が行われている。ただし、昭和26年の調査については、調査地点が明確でないため、平成元年に行われた調査を第1地点とし、平成18年度の調査を第2地点とする。

昭和26年の調査では、掘立柱建物跡とみられる12基の柱穴を検出したとするが、詳細は不明である。遺物は縄文時代後期～晩期の堀之内式～安行Ⅲ式、千網式土器とともに東北地方に分布する大洞式などが出土している(大森 1952)。

水戸老人福祉センター建設に伴い実施された第1地点の調査では、遺構は台地縁に密集しており、縄文時代早期の竪穴状遺構8基が確認されている(井上 1992)。遺物は早期後葉の茅山式～後期中葉の加曾利B2式土器の破片等が多数出土している。

市道常磐10号線改良工事に伴い実施された第2地点の調査では、時期不明の縄文土器とともに磨石や石皿・蜂の巣石、礫器などが出土している。

砂川遺跡からは、昭和55年に実施された発掘調査の際に加曾利EⅢ-4式(柳澤 1995)期の竪穴住居跡4軒、加曾利EⅣ式期の竪穴住居跡15軒、加曾利EⅣ式期の土坑141基、加曾利EⅣ式期の埋設土器14基が検出されている(渡辺 1981)。

軍民坂遺跡では、平成17年度の試掘・確認調査において、縄文時代中期後半加曾利EⅢ式期の竪穴住居跡が調査され、うち1軒は東北地方においてよく知られる石組複式炉を持つことが明らかとなった。県内でも類例が少ない貴重な例としてあげられよう。

白石遺跡からは、平成2～3年に実施された発掘調査の際に加曾利EⅢ～加曾利EⅣ式期の竪穴住居跡が検出されている(樫村 1993)。また、遺構外より阿玉台式、加曾利EⅢ式、加曾利EⅣ式、大木式土器の破片が出土している。(松浦)

(3) 弥生時代

弥生時代の遺跡は愛宕町遺跡，文京1丁目遺跡，長者山遺跡，梵天遺跡，権現山遺跡，平塚遺跡，軍民坂遺跡，富士山遺跡，小原内遺跡，堀遺跡，塚宮遺跡，白石遺跡，文京2丁目遺跡が該当する。これらのうち発掘調査で遺構が確認されているのは堀遺跡だけであり，ほかは全て表面採集により弥生時代後期の土器の出土が確認されている。堀遺跡（第2地点）からは，弥生時代後期の竪穴住居跡が1軒検出されており，弥生土器の壺2個体と土師器の壺と埴が共伴して出土している（井上・千葉・檜村 1995）。（松浦）

(4) 古墳時代

台渡里遺跡の周辺における古墳時代の集落跡は愛宕町遺跡，文京1丁目遺跡，長者山遺跡，阿川遺跡，梵天遺跡，権現山遺跡，平塚遺跡，富士山遺跡，小原内遺跡，坏渡里遺跡，中河内遺跡，渡里町遺跡，塚宮遺跡，白石遺跡，宮元遺跡，文京2丁目遺跡が該当する。これらの大半は踏査により確認された遺跡である。これらのうち時期が判明しているのは前期の遺物が確認されている文京1丁目遺跡，堀遺跡，中河内遺跡の4遺跡および古墳後期の土師器が出土している塚宮遺跡に限られる。

これらの集落跡のうち発掘調査が行われているのは，白石遺跡，堀遺跡，塚宮遺跡である。白石遺跡からは，7世紀前葉の住居跡が3軒確認されている（檜村 1993）。

集落跡の周辺に営まれている古墳は，中期～終末期のものが確認されている。中期には国指定史跡愛宕山古墳が築造されている。本古墳は全長136.5m，後円部径78m，前方部幅75m，後円部高10.5m，前方部高9mを測り，楕形の周壕を巡らす大型の前方後円墳である。採集されている埴輪に黒斑がみられることから5世紀前半に築造されたとする見解がある（井・小宮山 1999）。

また，その近傍に立地したといわれる姫塚古墳もこの時期に該当するらしい。本墳はかつて愛宕山古墳の西方に存在したらしいが，昭和46年に宅地造成のため破壊されてしまった。全長58m，後円部径40m，前方部幅20m，後円部高4m，前方部高3.5mで，有孔円板と鉄刀の一部が出土したと伝えられており，盗掘孔の状況から粘土槨であったと推定されていることなどから（藤村・塩谷 1982），愛宕山古墳に近接した時期が推定されている（井・小宮山 1999）。

後期の古墳は，富士山古墳群，小原内古墳群が該当する。富士山古墳群，小原内古墳群からは円筒埴輪や形象埴輪，直刀，鉄鏃などが出土しており，いずれも6世紀代の築造と考えられる。終末期の古墳は，西原古墳群と権現山横穴群が該当する。権現山横穴群の第1号墓および第2号墓の玄室には線刻壁画が認められる。造営年代は7世紀前葉とする見解（大森 1974，生田目・稲田 2002）と8世紀前後とする見解（川崎 1982）とがある。

西原古墳群は前方後円墳1基と円墳8基から構成される古墳群である。平成17年度に水戸市教育委員会が実施した個人住宅建設に伴う発掘調査で墳丘が削平された円墳の周溝が検出され，内部から円筒埴輪片が多数出土したことから，少なくとも本古墳群は6世紀代から形成され，7世紀まで造墓活動が継続することが判明した。また，本古墳群には，全長約50m，後円部径30m，高さ3.5m前後，前方部幅15mの規模を持つ前方後円墳があり，注目される。（渥美・川口）

(5) 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡のうち発掘調査が行われているのは、アラヤ遺跡、台渡里廢寺跡、渡里町遺跡、砂川遺跡、白石遺跡である。

アラヤ遺跡は第1地点の調査の際に4軒の竪穴住居跡と工房跡1軒、掘立柱建物跡2棟、粘土採掘坑2基が確認されている。遺構の造営時期は出土している土器から、工房跡が7世紀末～8世紀初頭、竪穴住居跡は8世紀～9世紀、掘立柱建物跡は竪穴住居跡との重複関係から9世紀以降とみられる。工房跡や竪穴住居跡からは刀子や砥石などが一定量出土しており、寺院や官衙の造営に係わる集落が展開していた可能性が高い。その後、官衙に関連する可能性がある掘立柱建物跡がこの地に展開していることから、土地利用が変化した状況がうかがえる。

第2地点の調査では、1区において東西方向の区画溝が確認され、覆土から炭化米が出土していることから那賀郡衙正倉院の区画溝とみられる。また、同調査の4区では柱間7尺の掘立柱建物の柱穴も確認されており、正倉院に関連する建物の可能性がある。

砂川遺跡からは、昭和55年に実施された発掘調査の際に奈良・平安時代の竪穴住居跡19軒、竪穴状遺構6基、溝2条、井戸1基が検出されている(渡辺 1981)。井戸跡からは木製の曲物や櫛、高台付盤など注目される遺物が出土している。

台渡里廢寺跡の調査・研究は、高井悌三郎による戦前の学術調査を嚆矢とする(高井 1964)。その成果を受け、昭和20年に長者山地区と観音堂山地区、南方地区の3地区が県指定史跡に指定された。

長者山地区は、炭化米が出土すること、瓦倉が4棟確認されていることから(高井 1964, 瓦吹 1991)、那賀郡衙正倉院と推定されていた(瓦吹 1991, 黒澤 1998)。平成18年度には、市教育委員会が行った範囲確認調査により、新たに9棟の礎石建物跡と北側区画溝が確認され、郡衙正倉院であることが確定的になったといえる。

観音堂山地区については、これまで那賀郡衙政庁跡や河内駅家とする見解もあったが(瓦吹 1991, 外山 1994)、平成14年から16年にかけて市教委が行った範囲確認調査の結果、西側に講堂が、その北東に金堂とさらに東側に塔が並び、金堂の北西に経蔵もしくは鐘楼と考えられる礎石建物が配置され、講堂の対極に位置するところには中門が配置される東向きの独自の伽藍配置をもつとみられ、その創建年代は7世紀後半に遡ることが明らかとなった(川口・小松崎・新垣編 2005, 川口 2006, 2007)。出土遺物には平瓦や丸瓦の凹面や凸面に台渡里廢寺跡の造営に関与した那賀郡の郷名や個人名がへら書きされたもの、郷名を示す押印文字瓦、相輪の一部がへら書きされた瓦や「佛」という字の周りに絵が描かれた瓦、金箔製品、瓦製相輪の請花花弁と擦管など東国の初期寺院でも初見の例となる仏教関連遺物が確認されている。

南方地区についてはこれまでも寺院と考えられてきたが(高井 1964, 瓦吹 1991, 黒澤 1998)、平成14年から16年にかけて市教育委員会が行った範囲確認調査の結果、塔跡基壇の内部より内面黒色処理の施された土師器杯の破片が出土したことから、9世紀後半に入ってから造営された法隆寺式伽藍配置を意識した寺院であることが判明した。観音堂山地区の初期寺院が9世紀後半には火災で廢絶していることから、観音堂山地区の伽藍の焼亡後に、南方地区に再建しようとしたが、造営を途中で中止した可能性が高い(川口・小松崎・新垣編 2005)。従って、確認されなかった講堂は本来存在

しない可能性が高い。なおこれらの成果に基づき、平成17年には観音堂山地区と南方地区が国指定史跡に指定されている。

白石遺跡からは、平成2～3年に実施された発掘調査の際に奈良・平安時代の竪穴住居跡16軒、掘立柱建物跡6棟、基壇1基、溝1条、土坑12基が検出されている（櫻村 1993）。特に注目されるのは東西2間、南北36間のⅡ区2号建物であり、長さは桁行約88mにもなる。第1号溝とともに公的施設の一部を構成していたと考えられる。溝の時期から8世紀前半に帰属すると考えられている。

白石遺跡に隣接する田谷廃寺跡からは、多数の瓦とともに「□里丈部里」,「生マ□里」,「岡田」など台渡里廢寺跡長者山地区と同様の文字瓦が出土している。小字には「百壇」という礎石建物基壇との関係が推測される地名が遺されており、3箇所が存在が報告されている（伊東 1975）。

（松浦）

（6）中世～近代

中世～近代の遺跡は長者山城跡、アラヤ遺跡、台渡里廢寺跡が挙げられる。いずれも、長者山城跡に関連するものが多い。

長者山城跡は、11世紀まで遡る城主の伝承があるものの、15～16世紀に水戸城主江戸氏の重臣春秋氏の居城として機能し、この地域の拠点的な城郭となっていたことが想定される（佐々木・川口・関口・新垣・渥美・木本・林・小野・市瀬・大橋 2007）。同城跡は、これまで地形測量図や縄張り図が作成されたことはあったものの、発掘調査は行われていなかった。しかしながら、平成18年の個人住宅建設に伴う発掘調査で、15世紀後半～16世紀初頭の遺物が出土する地下式坑や井戸跡、土坑・ピット多数が検出され、長者山城跡の機能していた時期に関する手がかりが得られた。アラヤ遺跡では、平成18年に実施された市道路改良工事に伴う発掘調査の際、台渡里廢寺や正倉院の古瓦を中世において再利用したと思われる瓦礫道が検出され、長者山城との関連が想定されている（佐々木ほか前同書）。

台渡里廢寺跡では、平成6年に実施された都市計画道路敷設に伴う発掘調査の第一調査区で確認された第一号井戸址から、15世紀～16世紀初頭のカワラケや内耳土器、播鉢などが出土しており（井上・千葉 1995）、平成15年に行われた範囲確認調査では、土塁に沿う形で観音堂山地区の初期寺院の礎石を落とし込んだ溝跡が確認されており、カワラケや内耳土器などが出土していることから、観音堂山地区の初期寺院は少なくとも15世紀には寺院の存在はなく、長者山城跡の一角として機能していたことが推定されている（川口・小松崎・新垣編 2005）。また、南方地区からは平成16年度範囲確認調査の際に、塔跡の基壇上およびその周辺から、多数の中・近世の土器類とともに五輪塔の部材、板碑片などが出土しており、基壇の南側には「咸平元寶」などの北宋銭や焼土・炭化物・骨粉を含む中世の火葬墓が集中して営まれている状況が確認されたことから、中・近世には塔跡が信仰の対象となっており、墓域としての土地利用が行われていたことが推察されている（川口・小松崎・新垣編 2005）。

台渡里廢寺跡（観音堂山地区）の第25次発掘調査では、17世紀前半の瀬戸・美濃産の陶器や波佐見産の磁器碗、17世紀後半の瀬戸・美濃産陶器大鉢、18世紀前半の肥前系磁器碗が出土している。また、4区で確認された現代のゴミ穴からは、近世～近代の製品とみられるカワラケとともに益子焼の土瓶

や土人形（恵比寿）が出土しており（佐々木・川口・大橋・林・渥美 2006），近世村落の成立が17世紀前半まで遡ることを間接的に示す資料が得られた。

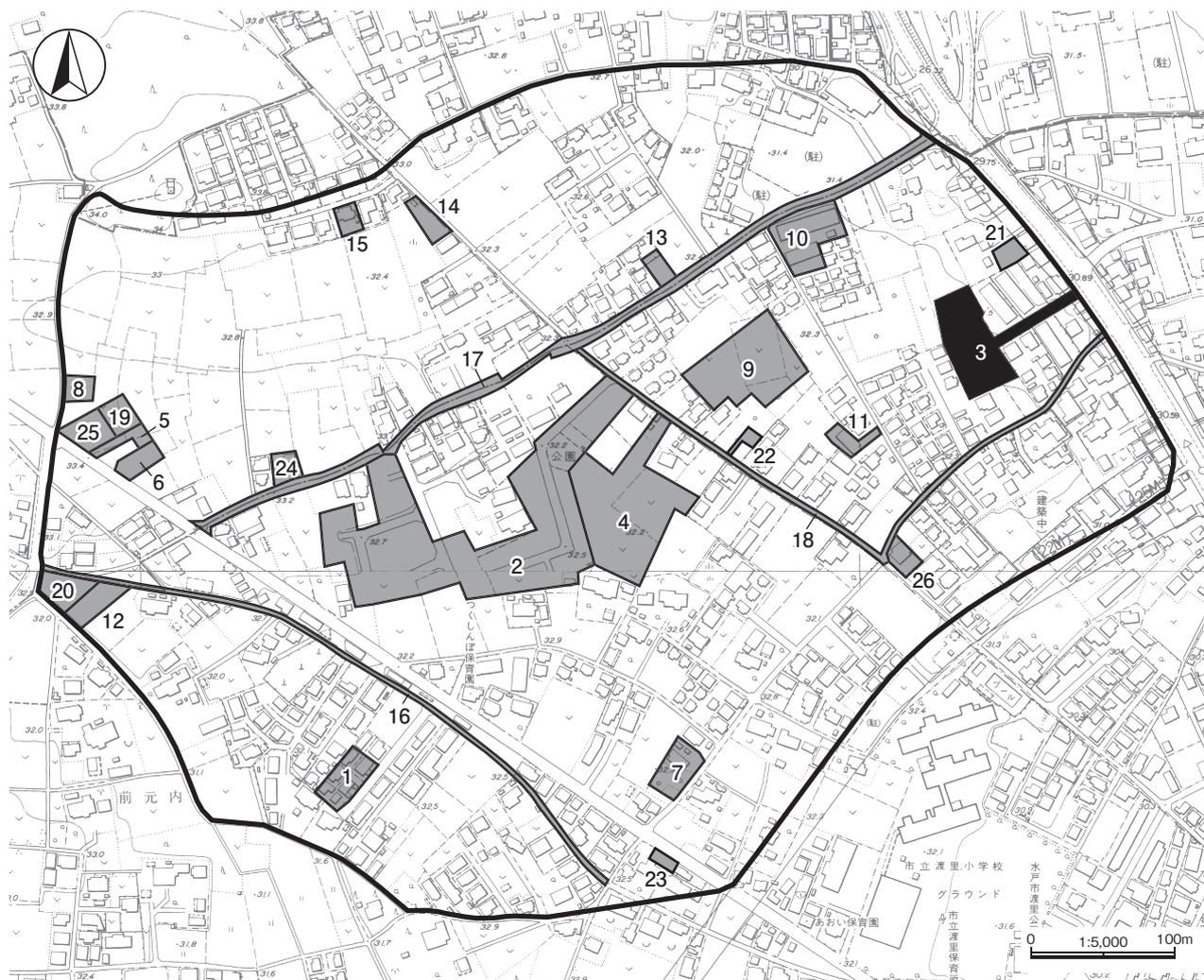
平成19年に行われた渡里町遺跡の発掘調査では，中・近世の所産と推定される東西と南北に走る溝が1条ずつ，井戸2基，ピット多数などが確認されている。遺物は，内耳鍋や陶磁器の細片が出土しているが，時期特定ができるものは少なかった（佐々木・林・川口・渥美・関口 2008）。

以上の成果から，堀遺跡の周辺では，おそらく15世紀後半～16世紀前半に隣接する長者山城跡に関わる城下集落などの土地利用が展開し，17世紀前半以降には近世村落が形成されていたと推定される。（松浦）

2-3 堀遺跡における既往の調査

堀遺跡における発掘調査は，試掘・確認調査を含めて現在のところ計26地点が調査されている。個人住宅建設に伴う狭小な調査や，現在整理作業中の地点も含むため，網羅的に記すのは適切でない。そこで，これまでの調査において注目されるべき成果について概要をまとめておく。

遺構として明確に確認されたもので最も古く考えられるのは，第2地点において確認された竪穴住



第3図 堀遺跡調査地点（1：5,000）

居跡1軒である。いわゆる十王台式の範疇となる弥生時代後期の壺と土師器壺及び埴が出土した（井上・千葉・榎村1995）。これらは共伴である可能性が高いことから、古墳時代前期初頭に帰属するものと考えられる。

第2地点において最も主体をなすのは、竪穴住居跡・掘立柱建物跡から構成される大規模な古代集落跡である。最も隆盛するのは、8世紀後半から9世紀にかけてである。特筆されるのは、刀子・鎌・鏃・釣針・釘・錠などの鉄製品や須恵器壺Gなど特殊な器種の土器の出土である。土坑から出土した人面墨書の土師器小甕とあわせて、この集落の特異性をよく表している（井上・千葉・榎村1995）。なお、5号掘立柱建物跡は長舎風の建物跡で9世紀代の公的建物の可能性があることから（榎村2005）、当該集落は、那賀郡衙の造営や修造などに関わった計画村落である可能性が指摘できよう。

第2地点の周辺では、第9・10・11の各地点において、竪穴住居跡を主体として数多くの奈良・平安時代の遺構が確認されており、古代集落跡としての規模の大きさを知ることができる。

遺跡の南西端に位置する第1地点では、9世紀代の竪穴住居跡とともに、規模の異なる3棟の側柱掘立柱建物跡が検出されており（伊藤1994）、当該集落の規模の大きさをよく表す。なお第1地点の北方にあたる第6地点では、廂・孫廂をもつ掘立柱建物跡が調査されており、これはいわゆる古代村落内の仏堂に該当する可能性がある。古代において村落内の仏堂は、しばしば竪穴住居跡や掘立柱建物跡などで構成される生活空間の外縁部に位置することから、現在の包蔵地範囲がそのまま古代集落跡の範囲として理解されるだろう。

その他、いずれの地点も、多くは8世紀後半から9世紀にかけての遺構・遺物がみられ、上記の調査成果を補強する内容ではあるものの、訂正すべき内容ではない。現在隣接する官衙・寺院遺跡との関連性に注意しつつ、鋭意整理・検討の作業を進めているところである。（渥美）

第3章 調査の方法と成果

3-1 調査の方法

調査対象地は、宅地造成に伴う道路予定地と雨水貯留槽を設置する部分である。第2次調査範囲は、第1次調査範囲（平成17年-2005）を取り囲んで設定された（第5・6図）。

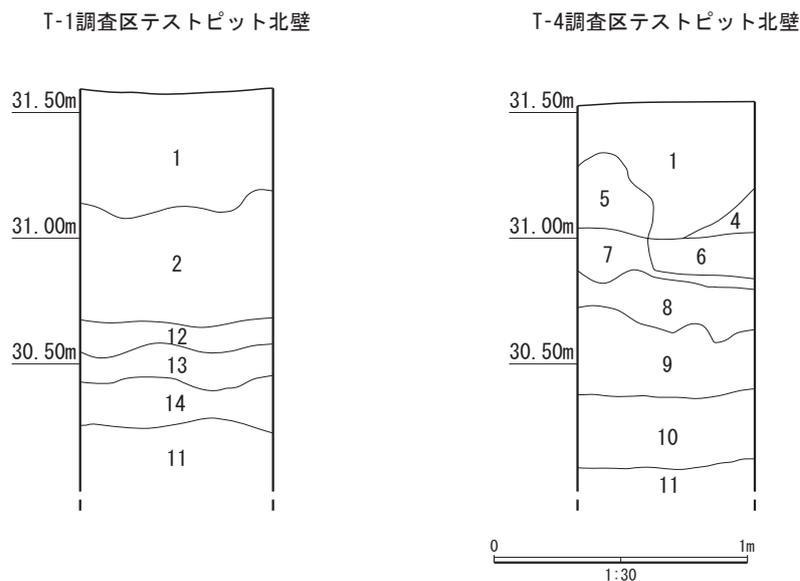
道路予定地は、調査区域の中央部と東端部の2箇所である。8箇所ある雨水貯留槽の設置場所は、道路予定地を囲んで設定された。調査区域中央部の道路予定地をC-1，東端をC-2，雨水貯留槽予定地は北から反時計回りにT-1・・・8と呼称した。遺構の名称は各調査区の記号番号の後に遺構番号を付した（例 C-1SK01はC-1調査区の1号土坑を表す）。

調査にあたっては重機を用いて表土を掘削し、遺構確認作業は人力により行った。遺構内遺物の取り上げや土層ポイントの記録には、公共座標（日本測地系）を用いて基準点を設置し、既知点を使用し、光波測距儀を用いて測量した。遺構については、写真測量と一部手実測を併用した。写真撮影は35mmモノクロフィルム、35mmカラーリバーサルフィルムとデジタルカメラ（500万画素）を使用し、適宜記録撮影を行った。（渡辺）

3-2 基本土層

基本土層は、T-1とT-4調査区の北壁を利用してテストピットを掘り下げて土層観察を行った。基本土層の概要は以下のとおりである。

T-1調査区のテストピットは灰褐色の粘土層まで掘り下げたが、ローム層は観察されない。粘土層の上層には締りはあるが、粘性に乏しい赤褐色土が堆積する。赤褐色土は砂質土に、地下水等に含まれている鉄分が付着した層であると思われる。赤褐色土の上層は灰黄色の砂質土層が観察され、その上層は黒褐色土の堆積となっている。赤褐色土はC-2・T-8調査区でも観察され、調査範囲に広



第4図 基本土層図

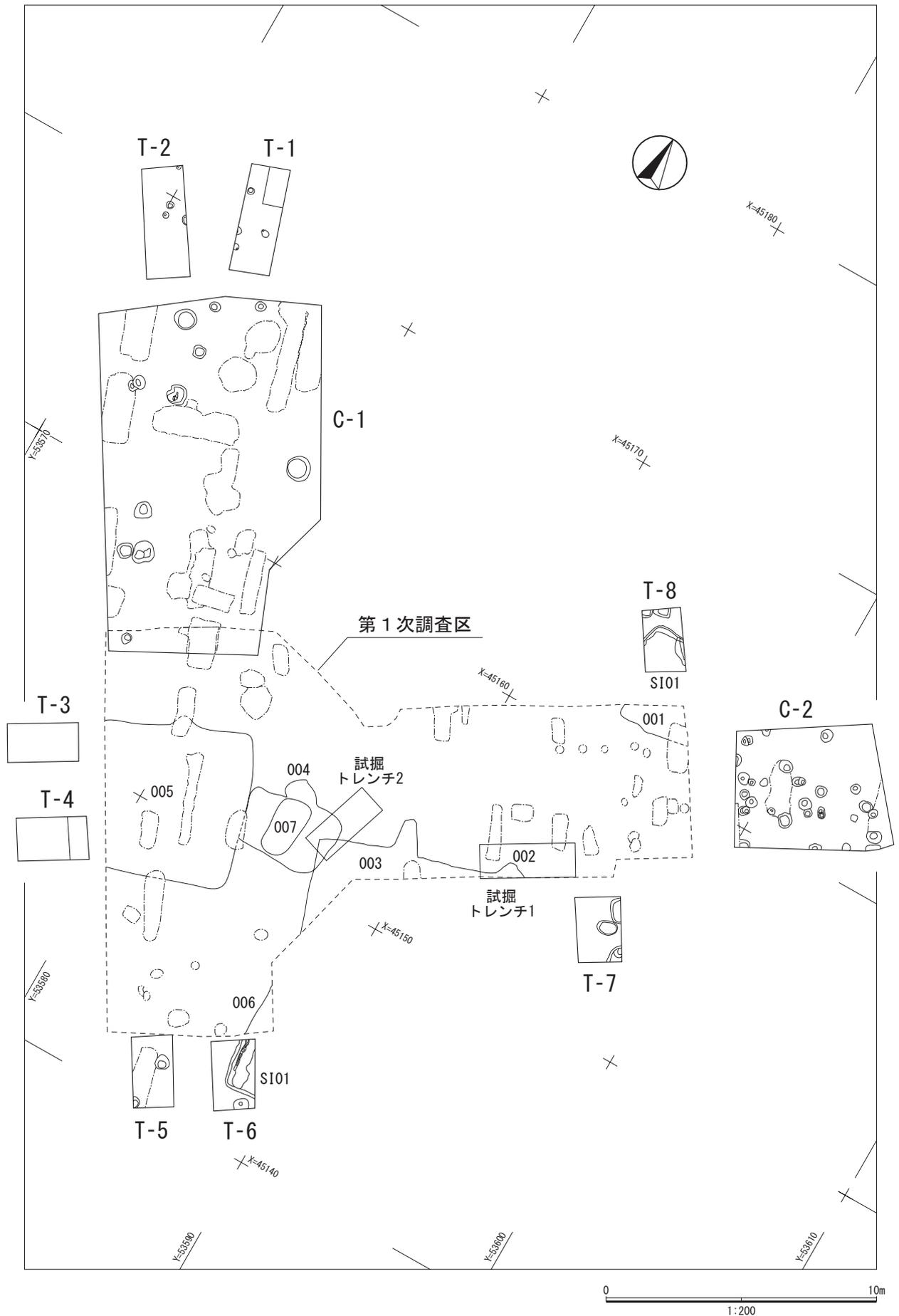
く分布している。赤褐色土の下層はいずれも粘土層である。

T-4 調査区のテストピットは灰褐色の粘土層まで掘り下げた。粘土層の上層に、しまり、粘性ともに強いロームの堆積が4層確認された。

- 1層 10YR3/2 黒褐色土 近代の耕作土。しまりなし。粘性なし。
- 2層 10YR2/1 黒色土 しまり普通。粘性普通。
- 4層 10YR4/4 褐色土 ローム層への漸移層。しまり弱い。粘性弱い。
- 5層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 ロームブロック（3cm）を多く含む。しまり強い。粘性強い。
- 6層 7.5YR5/2 灰褐色土 にぶいロームブロック（3～5cm）を含む。しまり普通。粘性普通。
- 7層 10YR6/6 明黄褐色土 白色・赤褐色粒を含む。しまりあり。粘性普通。
- 8層 10YR6/6 明黄褐色土 黒色粒を多く、白色粒を少量含む。しまりあり。粘性あり。
- 9層 10YR6/6 明黄褐色土 黒色粒を多く含む。しまり非常に強い。粘性非常に強い。
- 10層 10YR5/6 黄褐色土 黒色粒を含む。しまり非常に強い。粘性非常に強い。
- 11層 10YR7/2 にぶい黄橙色土 粘土層。しまり非常に強い。粘性非常に強い。
- 12層 10YR4/6 褐色土 黄褐色の砂質粒，暗褐色土を多く含む。しまりあり。粘性なし。
- 13層 10YR4/6 褐色土 黄褐色の砂質粒を多く含む。しまりあり。粘性なし。
- 14層 5YR5/6 明赤褐色土 鉄分を多く含み，白色粒が混入する。しまりあり。粘性なし。



第5図 調査区の位置



第6図 調査区方眼図

3-3 遺構

本遺跡の第1次調査では、竪穴住居跡6軒と土坑1基が検出されている。今回の第2次調査では、住居跡2軒、土坑7基、ピット50基が検出されている。

2軒の住居跡は狭小な調査区であるために、住居跡の全容を調査することはできなかった。

住居跡は、第1次調査と第2次調査の平面図と照合した結果、T-6 SI01号住居跡は平成17年に行われた第1次調査でその存在が確認され、その一部が調査されている006号遺構と同一住居跡であると推定される。また、T-8 SI01号住居跡は第1次調査の001号遺構と同一である。

(1) C-1 調査区

C-1調査区は、発掘調査予定地のほぼ中央部に位置し、東西5.8～8.2m、南北12.7～13.3m、面積約96㎡を測る。調査区は宅地造成のための道路予定地であり、道路の構造上方形と台形が組み合わさった形状である。調査区南から北に向かい緩やかな斜面となっている（標高差約0.35m）。遺構確認面は調査区南部ではローム層、北部では赤褐色の砂質土層となり、ローム層は観察されない。C-1調査区からは土坑2基、ピット10基が検出されている。

C-1調査区からは、一括遺物として縄文土器（1点）、須恵器（42点）、土師器（52点）、灰釉陶器（4点）、古代の瓦（3点）、陶磁器（4点）、時期不明の瓦（1点）の計107点、重量869.2gが出土している。土坑やピットの時期は不明である。

土坑

1号土坑

調査区東部に位置する。形状は平面形が円形、断面形が筒形を呈する。規模は長径0.90m、短径0.84m、深さ0.45m（確認面標高30.930m）を測る。

土坑底から灰黄色粘土層が検出された。粘土層は約0.15mの厚さで土坑下部の全面を満たし、粘土層の上面は比較的平坦である。このことから、粘土層は意図的に充填されたものと考えられる。

本土坑からは遺物は出土していない。

2号土坑

調査区北部に位置し、赤褐色土を掘り込んでいる。形状は平面形が円形、断面形は鍋底形を呈する。規模は長径0.84m、短径0.76m、深さ0.26m（確認面標高30.770m）を測る。本土坑からは遺物は出土していない。

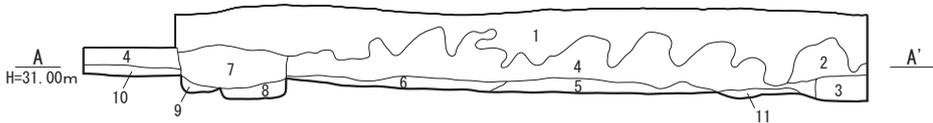
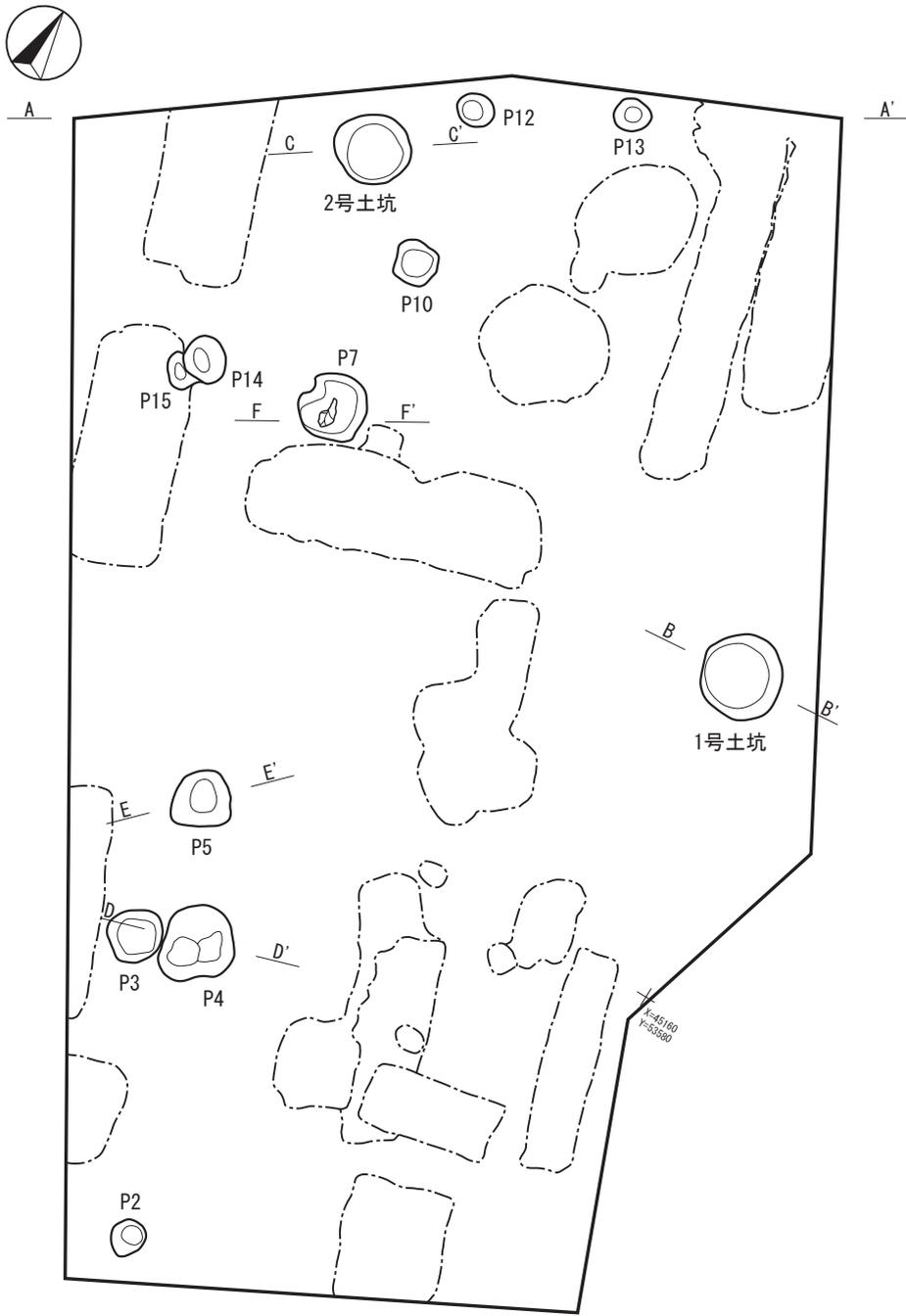
ピット（1・6・8・9・11は欠番）

2号ピット

調査区南部に位置する。形状は平面形が円形、断面形は筒形を呈する。規模は長径0.40m、短径0.36m、深さ0.20m（確認面標高31.013m）を測る。本ピットからは遺物は出土していない。

3号ピット

調査区南西部に位置し、西側で4号ピットと隣接する。形状は平面形が円形、断面形は鍋底形を呈する。規模は長径0.60m、短径0.58m、深さ0.10m（確認面標高31.101m）を測る。本ピットからは遺物は出土していない。



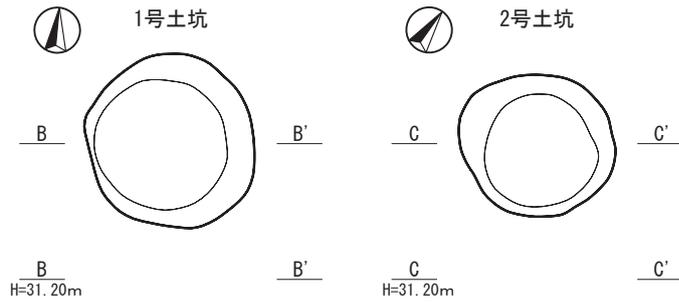
C-1 北壁土層

- 1 10YR3/2黒褐色土
- 2 10YR3/2黒褐色土
- 3 10YR3/3暗褐色土
- 4 10YR2/2黒褐色土
- 5 7.5YR4/3褐色土
- 6 7.5YR3/3暗褐色土
- 7 10YR4/3にぶい黄褐色土
- 8 7.5YR3/1黒褐色土
- 9 7.5YR3/1黒褐色土
- 10 7.5YR3/4暗褐色土
- 11 10YR4/4褐色土

近代の耕作土。しまりなし。粘性なし。
 ローム粒を少量混入。しまり普通。粘性なし。
 ローム粒をやや多く含む。しまりあり。粘性あり。
 ローム粒・赤褐色粒を少量含む。しまり普通。粘性なし。
 ローム粒・赤褐色粒を多く含む。しまり普通。粘性なし。
 赤褐色土粒を多く含む。しまりあり。粘性なし。
 赤褐色土ブロック (2cm) を含む。しまり普通。粘性なし。
 赤褐色土粒を多量に含む。しまりあり。粘性なし。
 赤褐色粒を含む。しまりなし。粘性なし。
 ローム粒・赤褐色粒を少量含む。しまりなし。粘性なし。
 粘土ブロックを含む。しまりなし。粘性普通。



第7図 C-1 調査区遺構図 (1)

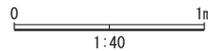


C-1 1号土坑

- | | | |
|---|----------------|--------------------------|
| 1 | 10YR3/1黒褐色土 | しまりなし。粘性なし。 |
| 2 | 10YR4/3にぶい黄褐色土 | 粘土をブロック状に含む。しまり普通。粘性普通。 |
| 3 | 10YR3/3暗褐色土 | 粘土を含む。しまり普通。粘性普通。 |
| 4 | 10YR3/3暗褐色土 | 粘土を多く含む。しまり普通。粘性あり。 |
| 5 | 10YR4/4褐色土 | 粘土粒・小ブロックを含む。しまり普通。粘性あり。 |
| 6 | 10YR6/2灰黄褐色土 | 粘土層。しまりあり。粘性あり。 |

C-1 2号土坑

- | | | |
|---|--------------|------------------------|
| 1 | 7.5YR2/2黒褐色土 | 赤褐色土粒を少量含む。しまりなし。粘性なし。 |
| 2 | 7.5YR4/3褐色土 | 赤褐色土粒を多く含む。しまりなし。粘性なし。 |
| 3 | 5YR4/8赤褐色土 | しまりあり。粘性なし。 |
| 4 | 7.5YR5/6明褐色土 | 粘土質の層。しまりあり。粘性あり。 |
| 5 | 7.5YR4/3褐色土 | 粘土を多量に含む。しまりあり。粘性あり。 |



第8図 C-1 調査区遺構図(2)

4号ピット

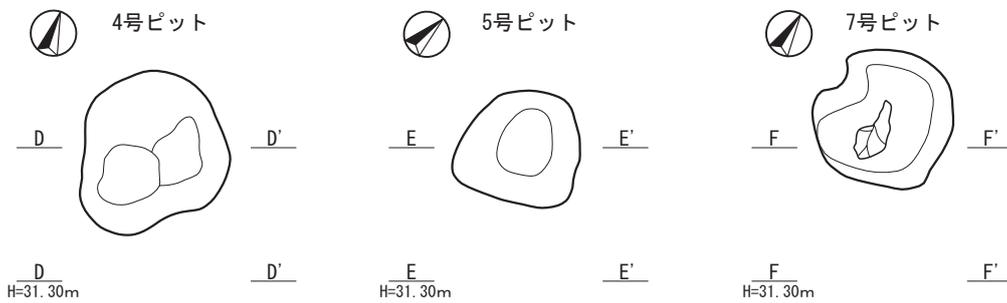
調査区南西部に位置し、形状は平面形が不整形、断面形は鍋底形を呈する。規模は長径0.77m、短径0.76m、深さ0.40m(確認面標高31.101m)を測る。本ピットからは遺物は出土していない。

5号ピット

調査区南西部に位置し、形状は平面形が台形、断面形は鍋底形を呈する。規模は長径0.62m、短径0.61m、深さ0.30m(確認面標高31.060m)を測る。本ピットからは遺物は出土していない。

7号ピット

調査区北部に位置し、赤褐色土を掘り込んでいる。形状は平面形が円形、断面形は鍋底形を呈する。規模は長径



C-1 P4

- | | | |
|---|---------------|-----------------------------|
| 1 | 7.5YR4/2灰褐色土 | にぶいロームをブロック状に含む。しまりなし。粘性なし。 |
| 2 | 7.5YR5/8明褐色土 | ロームを多く含む。しまり普通。粘性普通。 |
| 3 | 7.5YR4/3褐色土 | にぶいローム層。しまり普通。粘性普通。 |
| 4 | 7.5YR6/8明黄褐色土 | ロームを主とする。しまりなし。粘性なし。 |
| 5 | 7.5YR4/6褐色土 | にぶいローム主体とする。しまり普通。粘性普通。 |
| 6 | 7.5YR4/4褐色土 | にぶいロームを多く含む。しまり普通。粘性普通。 |
| 7 | 7.5YR3/4暗褐色土 | ローム粒を含む。しまりなし。粘性なし。 |
| 8 | 7.5YR3/4暗褐色土 | しまりなし。粘性なし。 |
| 9 | 7.5YR3/3暗褐色土 | しまりなし。粘性なし。 |

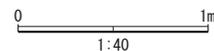
C-1 P5

- | | | |
|---|-------------|-------------------------------|
| 1 | 10YR3/2黒褐色土 | ロームブロック(3cm)を少量含む。しまりなし。粘性普通。 |
|---|-------------|-------------------------------|

- | | | |
|---|----------------|-------------------------|
| 2 | 10YR3/1黒褐色土 | しまりなし。粘性なし。 |
| 3 | 10YR3/2黒褐色土 | ローム粒を少量含む。しまりなし。粘性なし。 |
| 4 | 10YR4/3にぶい黄褐色土 | ローム粒を含む。しまり普通。粘性なし。 |
| 5 | 10YR3/4暗褐色土 | しまりなし。粘性なし。 |
| 6 | 10YR3/3暗褐色土 | しまり普通。粘性普通。 |
| 7 | 10YR3/4暗褐色土 | にぶいロームを混入する。しまりなし。粘性普通。 |

C-1 P7

- | | | |
|---|--------------|-----------------------------|
| 1 | 7.5YR4/4褐色土 | 硬化した暗灰褐色の砂質土を含む。しまりなし。粘性なし。 |
| 2 | 7.5YR4/6褐色土 | 赤褐色をおびた硬化した砂質土層。しまりあり。粘性なし。 |
| 3 | 7.5YR2/2黒褐色土 | 赤褐色土粒を中量含む。しまりなし。粘性なし。 |
| 4 | 10YR3/2黒褐色土 | 赤褐色土粒を少量含む。しまりなし。粘性なし。 |
| 5 | 10YR2/3黒褐色土 | 赤褐色土粒を多量に含む。しまり普通。粘性なし。 |



第9図 C-1 調査区遺構図(3)

0.74m, 短径 0.71m, 深さ 0.37m (確認面標高 30.954m) を測る。

ピットの中央には礎石を推定させる石が直立した状態で検出されている。石の下部と上部層に、砂質土が硬化したと思われる褐色土層が観られる。ピット列として規則性がある他のピットの所在を精査したが検出できなかった。本ピットからは遺物は出土していない。

10号ピット

調査北西部に位置し、赤褐色土を掘り込んでいる。形状は平面形が方形、断面形は鍋底形を呈する。規模は長径 0.47m, 短径 0.45m, 深さ 0.26m (確認面標高 30.847m) を測る。ピット側壁に工具痕が観られる。本ピットからは遺物は出土していない。

12号ピット

調査区北部に位置し、赤褐色土を掘り込んでいる。形状は平面形が円形、断面形は鍋底形を呈する。規模は長径 0.41m, 短径 0.35m, 深さ 0.19m (確認面標高 30.770m) を測る。本ピットからは遺物は出土していない。

13号ピット

調査区北東部に位置し、赤褐色土を掘り込んでいる。形状は平面形が円形、断面形は鍋底形を呈する。規模は、長径 0.38m, 短径 0.36m, 深さ 0.11m (確認面標高 30.763m) を測る。本ピットからは遺物は出土していない。

14号ピット

調査区北西部に位置し、西側で15号ピットと重複する。ピットの形状は平面形が円形、断面形は鍋底形を呈する。規模は長径 0.52m, 短径 0.49m, 深さ 0.34m (確認面標高 30.954m) を測る。本ピットからは遺物は出土していない。

15号ピット

調査区北西部に位置し、西側は耕作による攪乱を受けている。ピットの形状は平面形が円形、断面形は鍋底形を呈する。規模は長径 0.42m, 短径 (0.30m), 深さ 0.47m (確認面標高 30.954m) を測る。本ピットからは遺物は出土していない。

(2) C-2 調査区

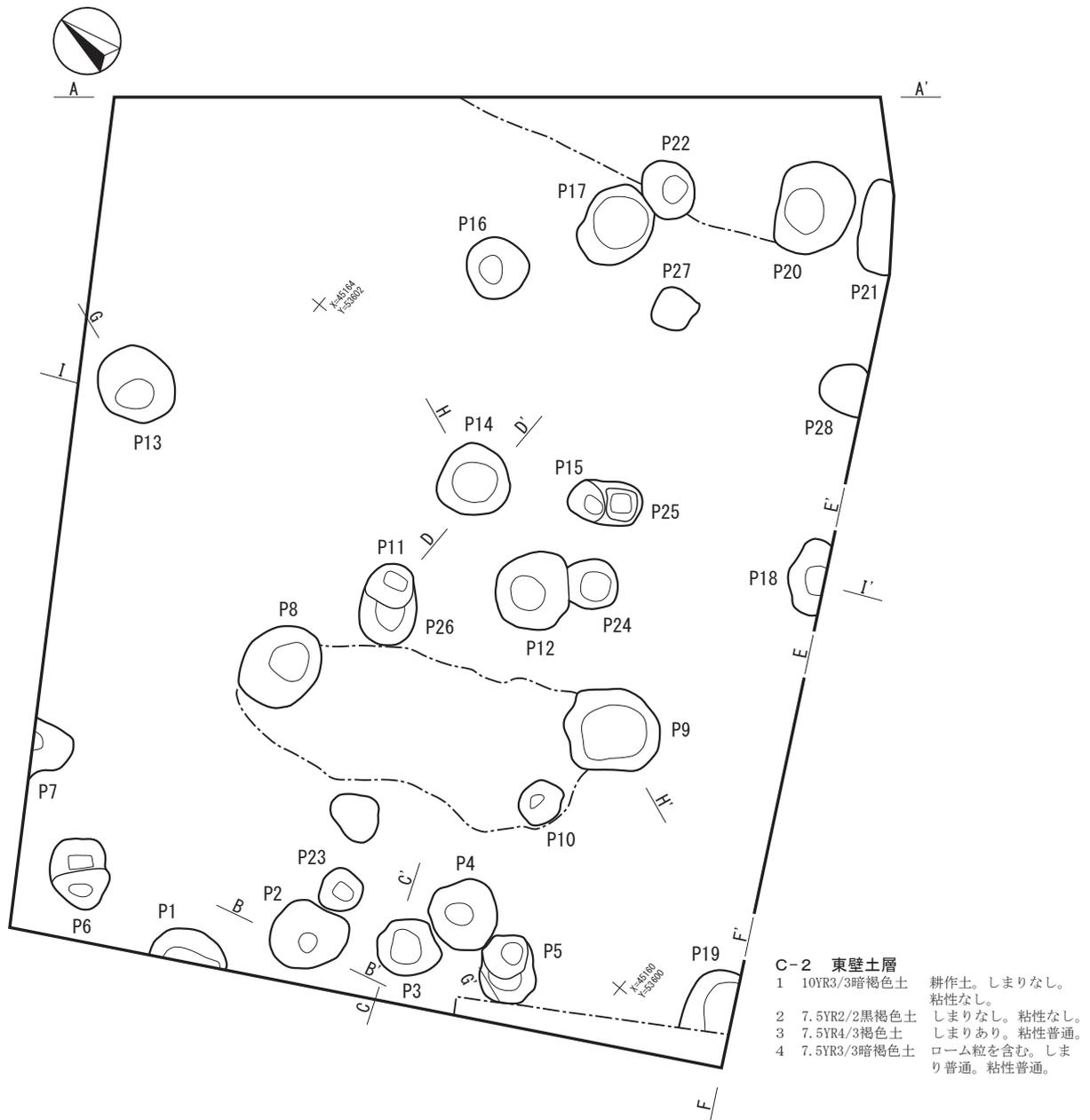
C-2 調査区は調査区域の東部に位置する。宅地造成に伴う道路予定地である。調査区の規模は、東西 5.0～5.9m, 南北 4.3～4.5m を測り、調査面積は約 25.3 m²である。

本調査区は、ローム層がほとんど観られず、灰黄褐色の粘土層の上層に薄く暗赤褐色土層が堆積している。C-1 調査区北部と同様な土層である。

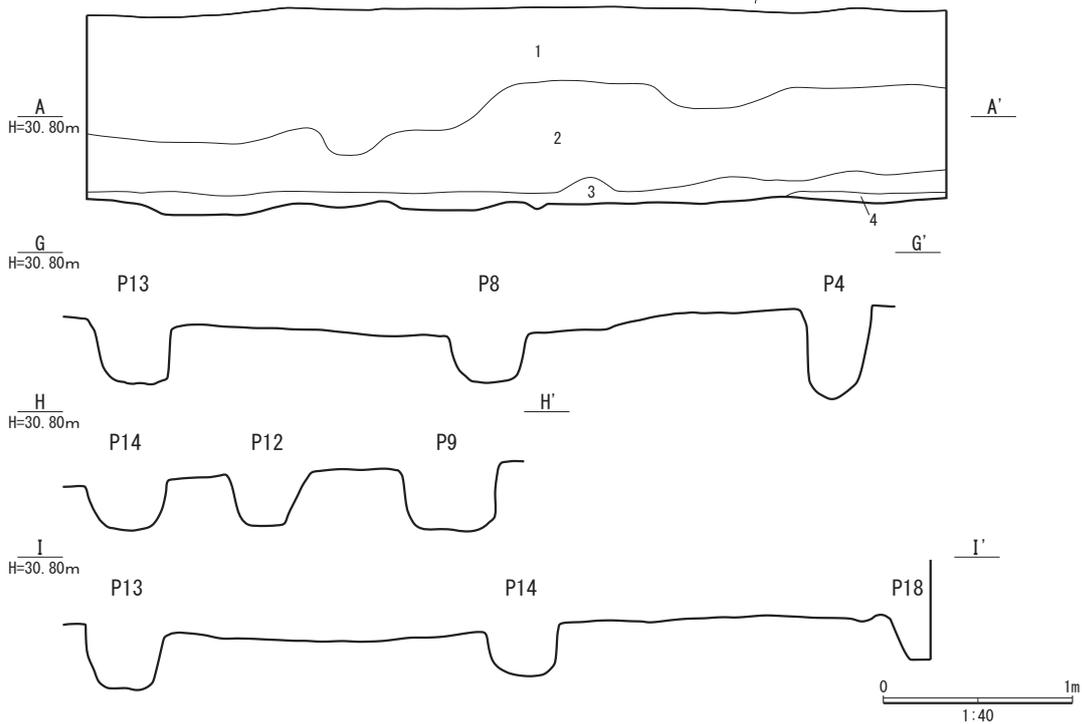
検出された遺構は28基のピット群である。調査区西・南壁にある1・18・19・21号ピットは2層から掘り込んでいる。28基のピットのうち26基のピットに工具痕が観察されるなど(第2表)、類似点が観られることから、大半のピットは2層から掘り込まれていると思われる。

25基のピットから観察された工具痕は、幅 0.10～0.15m, 厚さ 0.03～0.05m の大きさである。使用工具は扁平な鋤状の工具であろう。ピットの上部から直線的に掘り下げている。

ピット群には3基のピットが1組となり、直線的な列が3列で観られた。ピット列は、約 2.1m 間



- C-2 東壁土層**
- | | | |
|---|--------------|---------------------|
| 1 | 10YR3/3暗褐色土 | 耕作土。しまりなし。粘性なし。 |
| 2 | 7.5YR2/2黒褐色土 | しまりなし。粘性なし。 |
| 3 | 7.5YR4/3褐色土 | しまりあり。粘性普通。 |
| 4 | 7.5YR3/3暗褐色土 | ローム粒を含む。しまり普通。粘性普通。 |



第10図 C-2調査区遺構図(1)

隔で北西 (N-25°-W) に並ぶ 13・14・18 号ピットの列, 約 1.8m 間隔で北東 (N-20°-E) に並ぶ 4・8・13 号ピットの列, 約 0.9m 間隔で北東 (N-46°-E) に並ぶ 9・12・14 号ピットの列である。3 列の規則的な列に対応する他のピット列は, 調査区内には確認できない。3 列のピットが柱列として使用されたかは不明である。調査区が狭小であることから, 調査区外にこの 3 列のピット列に対応するピット列が検出される可能性は否定できない。3 列のピット列を構成する各ピットの形状や規模は, 長径 0.50 ~ 0.42m, 短径 0.46 ~ 0.41m, 深さ 0.22 ~ 0.46m であり, 4 号ピットの深さ 0.46m を除き形状も類似している。

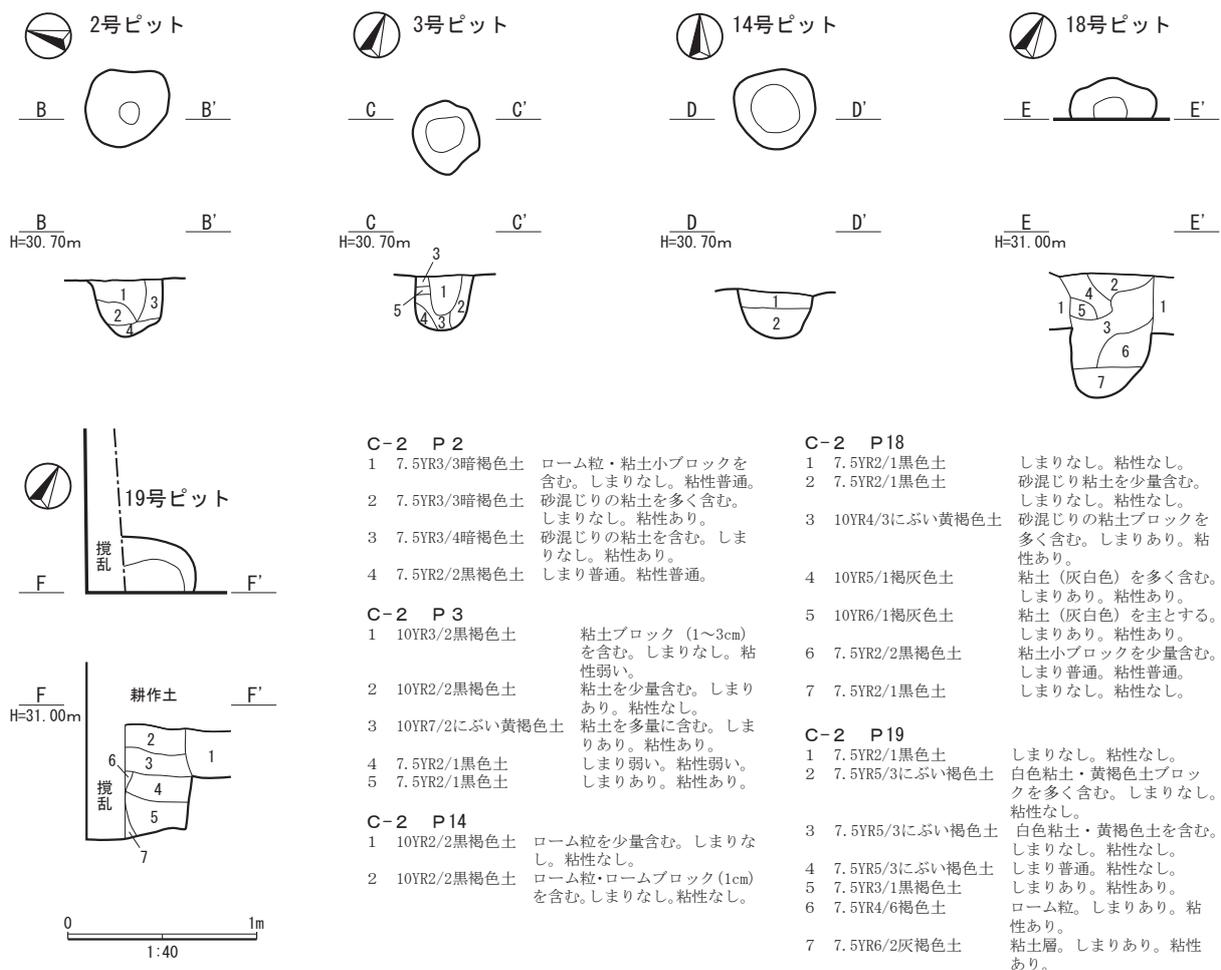
ピット

1号ピット

調査区北西部に位置する。ピットの西側約 1/2 が調査区外となる。形状は平面形が円形を, 断面形は鍋底形を呈する。規模は長径 0.48m, 短径 (0.30m), 深さ 0.21m (確認面標高 30.428m) を測る。ピットの側壁から工具痕が観察される。本ピットからは遺物は出土していない。

2号ピット

調査区西部に位置し, 23 号ピットに接している。形状は平面形が円形ないし不整円形, 断面形は



第 11 図 C-2 調査区遺構図 (2)

鍋底形を呈する。規模は、長径 0.42m, 短径 0.40m, 深さ 0.33m (確認面標高 30.473m) を測る。ピットの側壁から工具痕が観察される。本ピットからは遺物は出土していない。

3号ピット

調査区西部に位置し、南東側で4号ピットに隣接している。形状は平面形が不整形、断面形は鍋底形を呈する。規模は長径 0.39m, 短径 0.37m, 深さ 0.29m (確認面標高 30.473m) を測る。ピットの側壁に工具痕が観察される。本ピットからは遺物は出土していない。

4号ピット

調査区西部に位置し、北西側で3号ピットと、南西側で5号ピットに隣接する。形状は平面形が円形、断面形は鍋底形を呈する。規模は長径 0.42m, 短径 0.41m, 深さ 0.46m (確認面標高 30.473m) を測る。ピットの側壁に工具痕を観察できる。本ピットからは遺物は出土していない。

5号ピット

調査区西部に位置する。ピットの西部が浅くなり (0.15m), 柱を抜いた痕跡と思われる。形状は平面形が瓢箪形、断面形は有段の鍋底形を呈する。規模は長径 0.42m, 短径 0.32m, 深さ 0.44m (確認面標高 30.506m) を測る。ピットの側壁から工具痕を観察できる。本ピットからは遺物は出土していない。

6号ピット

調査区北西部に位置する。形状は平面形が不整形、断面形は鍋底形を呈する。ピットの西部は深さ 0.26m 程と浅くなり、柱を抜いた痕跡かと思われる。長径 0.44m, 短径 0.36m, 深さ 0.40m (確認面標高 30.572m) を測る。ピットの側壁から工具痕を観ることが出来る。本ピットからは遺物は出土していない。

7号ピット

調査区北部に位置し、ピット北側は調査区外となる。形状は平面形が方形、断面形は鍋底形を呈する。長径 0.26m, 短径 (0.24m), 深さ 0.29m (確認面標高 30.572m) を測る。ピットの側壁から工具痕を観ることが出来る。本ピットからは遺物は出土していない。

8号ピット

調査区中央部に位置する。形状は平面形が円形、断面形は鍋底形を呈する。規模は長径 0.52m, 短径 0.44m, 深さ 0.27m (確認面標高 30.372m) を測る。ピットの側壁では工具痕が観られる。本ピットからは遺物は出土していない。

9号ピット

調査区南部に位置する。形状は平面形が不整形、断面形は鍋底形を呈する。規模は長径 0.58m, 短径 0.49m, 深さ 0.35m (確認面標高 30.525m) を測る。ピットの側壁には工具痕が残されている。本ピットからは遺物は出土していない。

10号ピット

調査区南部に位置する。形状は平面形が方形、断面形は鍋底形を呈する。規模は長径 0.28m, 短径 0.25m, 深さ 0.24m (確認面標高 30.525m) を測る。ピットの側壁には工具痕が残されている。本ピットからは遺物は出土していない。

11号ピット

調査区中央部に位置する。本ピットの南西部で26号ピットと重複している。形状は、平面形が方形、断面形は鍋底形を呈する。規模は長径(0.32m)、短径0.29m、深さ0.37m(確認面標高30.374m)を測る。ピットの側壁には工具痕が観察される。本ピットからは遺物は出土していない。

12号ピット

調査区中央部に位置し、東側で24号ピットと重複する。形状は、平面形が円形、断面形は鍋底形を呈する。規模は長径0.47m、短径0.44m、深さ0.30m(確認面標高30.489m)を測る。ピットの側壁には工具痕が観察される。本ピットからは須恵器片(1点)、重量11.7gが出土している。小片であるために時期を判定することは困難である。

13号ピット

調査区北部に位置する。形状は平面形が円形、断面形は鍋底形を呈する。規模は長径0.49m、短径0.42m、深さ0.35m(確認面標高30.452m)を測る。ピットの側壁には工具痕が観られる。本ピットからは遺物は出土していない。

14号ピット

調査区中央部に位置する。形状は平面形が円形、断面形は鍋底形を呈する。規模は長径0.44m、短径0.41m、深さ0.26m(確認面標高30.427m)を測る。ピットの側壁には工具痕が観られる。本ピットからは遺物は出土していない。

15号ピット

調査区中央部に位置する。南東側で25号ピットと重複し、本ピットが25号ピットに切られている。形状は平面形が円形、断面形は鍋底形を呈する。規模は長径(0.24m)、短径(0.22m)、深さ0.27m(確認面標高30.472m)を測る。ピットの側壁には工具痕が残っている。本ピットから遺物は出土していない。

16号ピット

調査区東部に位置する。形状は平面形が円形、断面形は鍋底形を呈する。規模は長径0.37m、短径0.36m、深さ0.31m(確認面標高30.381m)を測る。ピットの側壁に工具痕が観察される。本ピットからは遺物は出土していない。

17号ピット

調査区南東部に位置し、東側で22号ピットに隣接している。形状は平面形が不整形、断面形は鍋底形を呈する。規模は長径0.47m、短径0.45m、深さ0.23m(確認面標高30.420m)を測る。ピットの側壁には工具痕が残っている。本ピットからは遺物は出土していない。

18号ピット

調査区南部に位置し、ピットの南東部は調査区外に広がっている。形状は平面形が不整形、断面形が筒形を呈する。ピットは2層から掘り込まれている。規模は長径0.46m、短径(0.22m)、深さ(0.28)m(確認面標高30.525m)を測る。ピットの側壁には工具痕が観察される。本ピットからは遺物は出土していない。

19号ピット

調査区南西部のコーナーに位置し、南東部は調査区外に、西部の一部が第1次調査の範囲に広がっ

ている。19号ピットは2層から掘り込まれている。形状は平面形の上部が円形、断面形は鍋底形である。規模は長径(0.37m)、短径(0.30m)、深さ0.25m(確認面標高30.542m)を測る。ピットの側壁には工具痕が残っている。本ピットからは遺物は出土していない。

20号ピット

調査区東部に位置する。形状は平面形が楕円形、断面形は鍋底形を呈する。規模は長径0.57m、短径0.44m、深さ0.40m(確認面標高30.380m)を測る。本ピットにも側壁に工具痕が観察される。本ピットからは遺物は出土していない。

21号ピット

調査区東部に位置し、ピットの南側約1/2は調査区外に広がっている。形状は平面形が方形、断面形は筒形を呈する。規模は長径0.56m、短径(0.19m)、深さ(0.10m)(確認面標高30.380m)を測る。ピットの側壁には工具痕が残っている。本ピットからは遺物は出土していない。

22号ピット

調査区東部に位置し、西側で17号ピットと隣接する。形状は平面形が円形、断面形は鍋底形を呈する。規模は長径0.36m、短径0.31m、深さ0.33m(確認面標高30.395m)を測る。ピットの側面に工具痕が残っている。本ピットからは遺物は出土していない。

23号ピット

調査区西部に位置し、西側で2号ピットに隣接している。形状は平面形が不整形、断面形が鍋底形を呈する。規模は長径0.27m、短径0.25m、深さ0.13m(確認面標高30.473m)を測る。本ピット側面には工具痕が確認される。本ピットからは遺物は出土していない。

24号ピット

調査区中央部に位置し、西側で12号ピットと重複する。形状は平面形が円形、断面形は鍋底形を呈する。規模は長径0.31m、短径0.28m、深さ0.18m(確認面標高30.489m)を測る。ピットの側壁には工具痕が残されている。本ピットからは遺物は出土していない。

25号ピット

調査区中央部に位置する。15号ピットと重複し、15号ピットを切って本ピットが掘り込まれている。形状は平面形が方形、断面形は筒形を呈する。規模は長径0.26m、短径(0.22m)、深さ0.34m(確認面標高30.472m)を測る。ピットの側壁には工具痕が観察される。本ピットからは遺物は出土していない。

26号ピット

調査区の中央に位置し、北東側で11号ピットと重複している。形状は平面形が楕円形を、断面形は皿状を呈する。規模は長径(0.45m)、短径0.34m、深さ0.30m(確認面標高30.374m)を測る。本ピットの側壁からは工具痕は観察されている。本ピットからは遺物は出土していない。

27号ピット

調査区南東部に位置し、形状は平面形が方形を、断面形が皿状を呈する。規模は長径0.30m、短径(0.28m)、深さ0.05m(確認面標高30.420m)を測る。小規模なピットである。本ピットの側壁から工具痕は確認されていない。本ピットからは遺物は出土していない。

28号ピット

調査区の南東部に位置する。形状は平面形が円形を、断面形は皿状を呈する。規模は長径 0.30m, 短径 (0.25m), 深さ 0.05m (確認面標高 30.463m) を測り, 小規模なピットである。本ピットの側壁からは工具痕が確認されていない。本ピットからは遺物は出土していない。

(3) T-1 調査区

調査範囲の北部に位置し, 南北に長い長方形である。調査区の規模は東西 1.48m, 南北 3.96m を測り, 調査面積は 5.86 m²である。本調査区からはピットが4基検出されているが, いずれも規模の小さいピットであり, 木根である可能性もある。本調査区およびピットから遺物の出土は確認されていない。

ピット

1号ピット

調査区西部に位置し, 西側は調査区外となっている。形状は平面形が円形, 断面形は円錐形を呈する。規模は長径 0.24m, 短径 (0.18m), 深さ 0.21m (確認面標高 30.602m) を測る。

2号ピット

調査区西部に位置し, 西側は調査区外となっている。形状は平面形が楕円形, 断面形は円錐形を呈する。規模は長径 0.31m, 短径 (0.17m), 深さ 0.13m (確認面標高 30.505m) を測る。

3号ピット

調査区中央部に位置する。形状は平面形が楕円形, 断面形は北西に傾いた円錐形を呈する。規模は長径 0.32m, 短径 0.23m, 深さ 0.27m (確認面標高 30.534m) を測る。

4号ピット

調査区北西部に位置する。形状は平面形が円形, 断面形は鍋底形を呈する。規模は長径 0.25m, 短径 0.23m, 深さ 0.14m (確認面標高 30.496m) を測る。

(4) T-2 調査区

本調査区は, 調査範囲の北部に位置し, T-1 調査区の西に隣接する。調査区の規模は東西 1.58m, 南北 4.18m を測り, 調査面積は 6.06 m²である。本調査区からは4基のピットが検出されているが, いずれも規模の小さいピットであり, 木根である可能性もある。

T-2 調査区からは, 須恵器 (1点), 土師器 (3点), 磁器 (1点) の計5点が出土し, 重量は 44.4g を量る。いずれも小片であり, 時期を判定することは困難である。ピットから遺物等の出土はない。

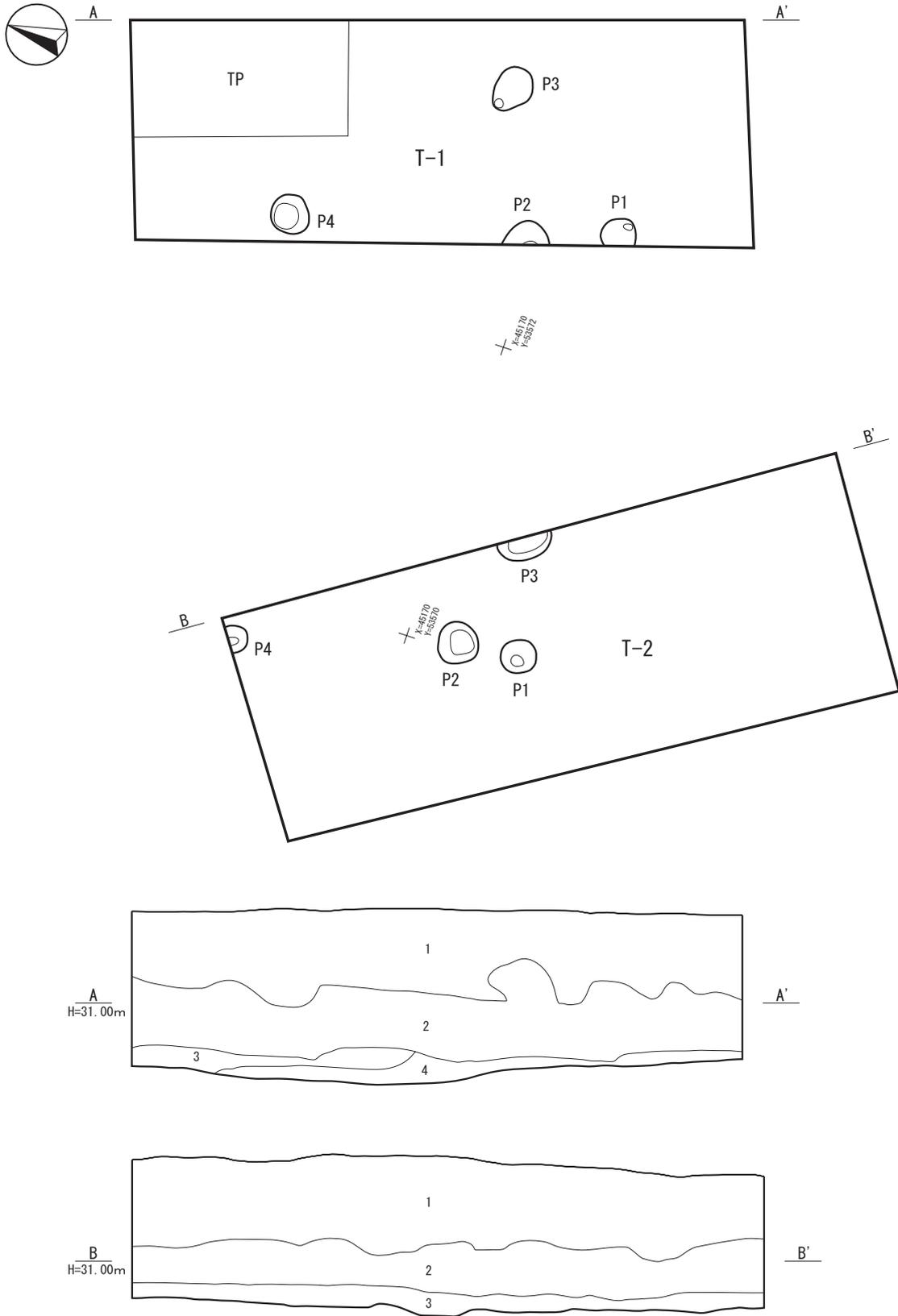
ピット

1号ピット

調査区中央部に位置する。形状は平面形が円形, 断面形は円錐形を呈する。規模は長径 0.24m, 短径 0.22m, 深さ 0.22m (確認面標高 30.739m) を測る。

2号ピット

調査区中央部に位置する。形状は平面形が円形, 断面形は鍋底形を呈する。規模は長径 0.28m, 短径 0.26m, 深さ 0.11m (確認面標高 30.790m) を測る。



T-1 東壁土層

- 1 10YR3/3暗褐色土 近代の耕作土。しまりなし。粘性なし。
- 2 10YR2/1黒色土 しまり普通。粘性普通。
- 3 10YR3/3暗褐色土 ローム粒・砂質土粒を含む。しまり普通。粘性なし。
- 4 10YR4/6褐色土 黄褐色の砂質粒を多く含む。しまりあり。粘性なし。

T-2 東壁土層

- 1 10YR3/2黒褐色土 近代の耕作土。しまりなし。粘性なし。
- 2 10YR2/1黒色土 しまり普通。粘性普通。
- 3 10YR3/3暗褐色土 黄褐色の砂質粒を多く含む。しまりあり。粘性なし。

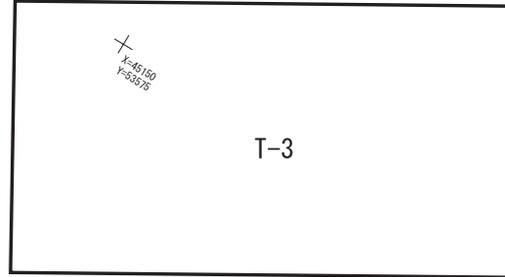
第12図 T-1・2調査区遺構図

3号ピット

調査区東部に位置し，東側は調査区外に広がる。形状は平面形が楕円形，断面形は円錐形を呈する。規模は長径0.36m，短径(0.14m)，深さ0.06m(確認面標高30.739m)を測る。

4号ピット

調査区北部に位置し，北側は調査区外に広がる。形状は平面形が円形，断面形は鍋底形を呈する。規模は長径0.18m，短径(0.14m)，深さ0.18m(確認面標高30.799m)を測る。

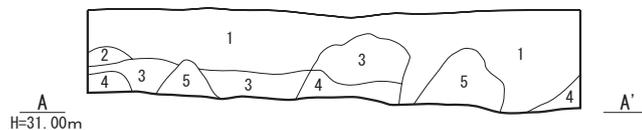
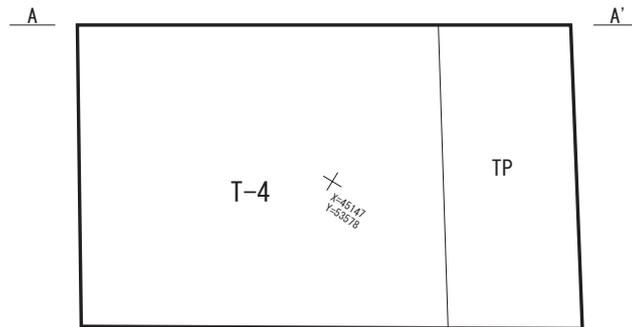


(5) T-3・4調査区

T-3・4調査区は，調査範囲の西側に位置し，東西に長く設定した。南側でT-3調査区に並行してT-4調査区を設定した。T-3調査区の規模は，東西2.60m，南北1.44mを測り，調査面積は3.74㎡である。T-4調査区の規模は，東西1.60m，南北2.60mを測り，調査面積は4.16㎡である。

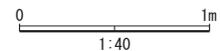
T-3・4調査区からは遺構の検出はされていない。

T-3調査区から須恵器(13点)，土師器(10点)，瓦(6点)，陶磁器・瓦質土器(3点)の計32点が出土し，重量は691.8gを量る。T-4調査区から須恵器(1点)，土師器(3点)，灰釉陶器(1点)の計5点が出土し，重量は82.0gを量る。T-4調査区出土の須恵器は蓋であり，その形状等から8世紀後半に比定されるものである。

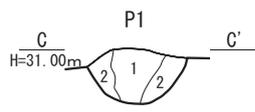
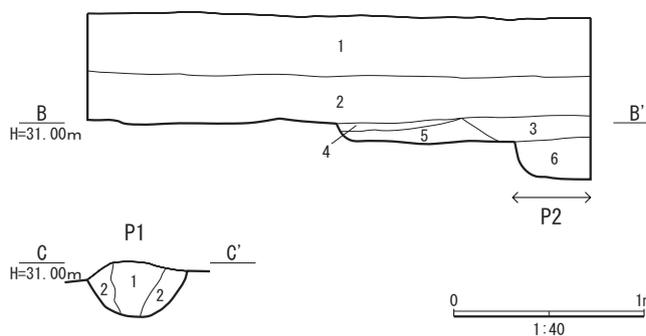
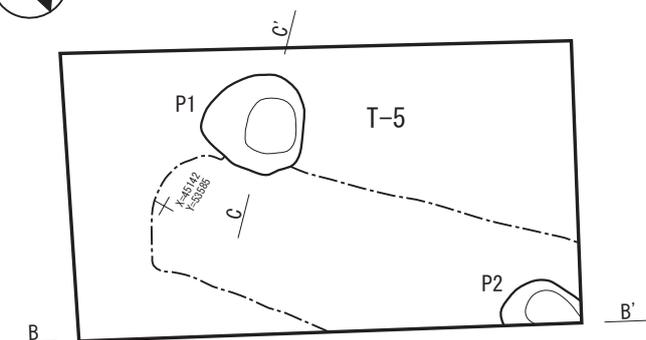


T-4 北壁土層

- | | | |
|---|----------------|-------------------------------|
| 1 | 10YR3/2黒褐色土 | 近代の耕作土。しまりなし。粘性なし。 |
| 2 | 10YR5/4黄褐色土 | ロームブロックを多く含む。しまりなし。粘性なし。 |
| 3 | 10YR2/2黒褐色土 | ローム粒を少量含む。しまり弱い。粘性強い。 |
| 4 | 10YR4/4黄褐色土 | ローム層への漸移層。しまり弱い。粘性弱い。 |
| 5 | 10YR4/3にぶい黄褐色土 | ロームブロック(3cm)を多く含む。しまり強い。粘性強い。 |



第13図 T-3・4調査区遺構図

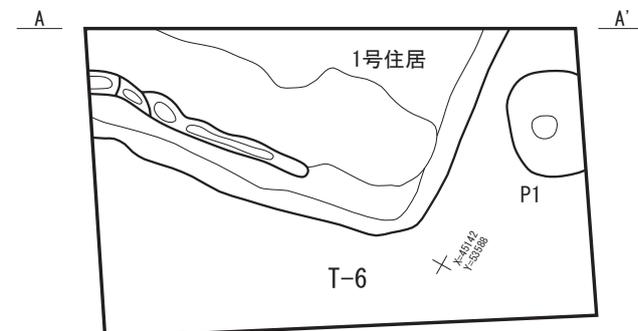
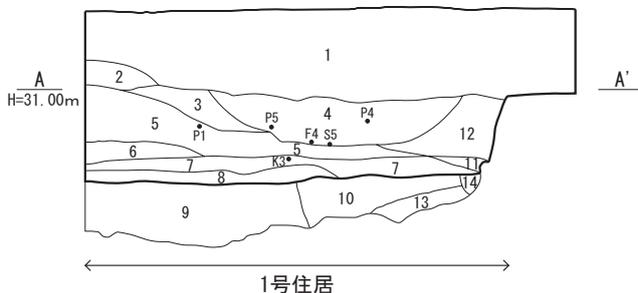


T-5 西壁土層

- | | | |
|---|--------------|--|
| 1 | 7.5YR3/1黒褐色土 | 近代の耕作土。しまりなし。粘性なし。 |
| 2 | 7.5YR2/2黒褐色土 | ローム粒・ロームブロック (3~5cm) をやや多く含む。しまり弱い。粘性なし。 |
| 3 | 7.5YR2/2黒褐色土 | ローム小ブロックを含む。しまりあり。粘性普通。 |
| 4 | 10YR3/1黒褐色土 | ロームブロック (3~5cm) を多く含む。しまりあり。粘性普通。 |
| 5 | 10YR4/4褐色土 | ローム粒を多量に、ロームブロック (3cm) を混入する。しまり普通。粘性普通。 |
| 6 | 10YR2/1黒色土 | しまりなし。粘性なし。 |

T-5 P1

- | | | |
|---|-------------|---------------------------------|
| 1 | 10YR3/1黒褐色土 | しまりなし。粘性なし。 |
| 2 | 10YR3/1黒褐色土 | ロームブロック (1~3cm) を含む。しまり普通。粘性なし。 |



T-6 東壁土層

- | | | |
|----|--------------|--|
| 1 | 7.5YR3/1黒褐色土 | 近代の耕作土。しまりなし。粘性なし。 |
| 2 | 7.5YR2/2黒褐色土 | ローム粒を少量含む。しまり弱い。粘性弱い。 |
| 3 | 7.5YR2/2黒褐色土 | ローム粒をやや多く含む。しまり普通。粘性普通。 |
| 4 | 7.5YR2/2黒褐色土 | ローム粒を中量含む。しまりなし。粘性なし。 |
| 5 | 7.5YR2/2黒褐色土 | ローム粒を多く含む。しまり弱い。粘性弱い。 |
| 6 | 7.5YR3/4暗褐色土 | ローム粒・ロームブロック (3cm) を多く含む。しまり普通。粘性普通。 |
| 7 | 7.5YR4/3褐色土 | ローム粒・にぶいロームを多く含む。しまりあり。粘性あり。 |
| 8 | 7.5YR4/3褐色土 | ローム粒・にぶいロームを中量含む。しまりあり。粘性あり。 |
| 9 | 7.5YR5/6明褐色土 | ロームブロック (3~5cm) を主体とする。しまりあり。粘性あり。 |
| 10 | 7.5YR4/4褐色土 | ロームブロック (1~5cm) と黒色土ブロックから成る。しまり普通。粘性なし。 |
| 11 | 7.5YR2/2黒褐色土 | ローム粒を少量含む。しまりなし。粘性なし。 |
| 12 | 7.5YR2/2黒褐色土 | ローム粒をやや多く含む。しまり普通。粘性普通。 |
| 13 | 7.5YR2/2黒褐色土 | ロームブロック (1cm) を少量含む。しまりあり。粘性普通。 |
| 14 | 7.5YR2/1黒色土 | しまり普通。粘性なし。 |

第 14 図 T-5・6 調査区遺構図

(6) T-5 調査区

本調査区は、調査範囲の南部に位置し、南北に長く設定した。本調査区の東側で T-6 調査区と並行する。本調査区の規模は東西 1.46m、南北 2.66m を測り、調査面積は 3.88 m²である。

本調査区からは、2 基のピットが検出された。

T-5 調査区からは、須恵器 (5 点)、土師器 (4 点)、灰釉陶器 (1 点)、陶磁器 (2 点) の計 12 点が出土し、重量は 93.8g を量る。いずれもが小片であり時期を判定することは困難である。

ピット

1号ピット

調査区中央部付近に位置し、ピットの西部は耕作による攪乱を受けている。形状は平面形が円形を呈し、断面形は鍋底形となる。規模は長径 0.54m、短径 0.52m、深さ 0.31m (確認面標高 30.970m) を測る。

本ピットからは、須恵器 (3 点)、土師器 (3 点) の計 6 点が出土し、重量は 46.2g を量る。出土遺物はいずれも小片であり、時期を判定することは困難である。

2号ピット

調査区南西角に位置し、ピットの約 3/4 が調査区外となっており、ピットの上面は耕作による攪乱を受けている。形状は平面形が方形、断面形は鍋底形を呈する。規模は長径 (0.35m)、短径 (0.34m)、深さ 0.20m (確認面標高 30.912m) を測る。本ピットから遺物は出土していない。

(7) T-6 調査区

本調査区は調査範囲の南部に位置し、T-5 調査区の東に並行するように設定した。調査区の規模は、東西 1.52m、南北 2.54m を測り、調査面積は 3.86 m²である。

本調査区からは住居跡 1 軒 (T-6 SI01)、ピット 1 基が検出されている。

T-6 調査区からは、須恵器 (7 点)、土師器 (2 点)、瓦 (1 点) の計 10 点が出土し、重量は 122.9g を量る。

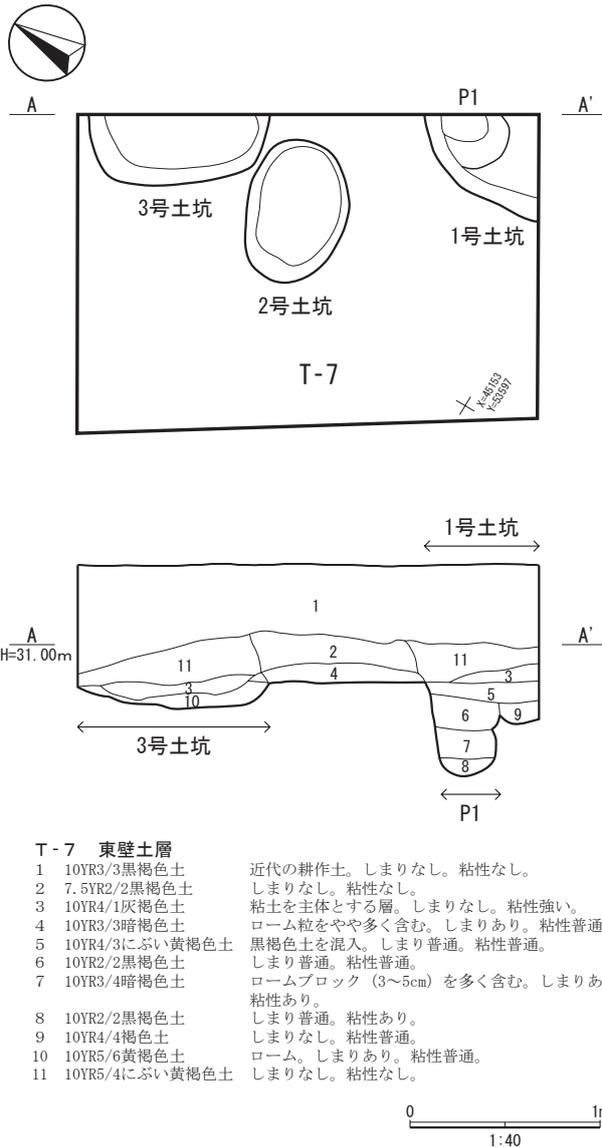
住居跡

1号住居跡

調査区の東部に位置し、調査区内に「く」の字状に所在する。今回調査した住居跡は、本遺跡第 1 次調査においてその一部が調査されている住居跡 (006 号遺構) の南西コーナー部であると推定される。

住居跡は 2 層下部から掘り込まれている。住居跡の形状は平面形が方形 (長軸 N-19°-W) を呈する。調査した住居跡の規模は南北 1.92m、東西 1.15m、深さは 0.50m (確認面標高 30.999m) である。床面はロームブロックに黒色土を混入して固めた貼り床であり、床面の残存状態は良好である。柱穴や竈は検出されないが、壁周溝は西部の一部が検出されている。貼り床の厚さは約 0.34m を測り、掘り方の底面は比較的平坦である。

本住居跡からは、須恵器 (5 点)、土師器 (9 点)、砥石 (1 点)、鉄鏃 (1 点) と瓦 (1 点) の計 17 点が出土し、その重量は 994.7g を量る。須恵器蓋の形状等から本住居跡の廃棄年代は 8 世紀前半と推定される。



第 15 図 T-7 調査区遺構図

土坑

1号土坑

調査区南東コーナー部に位置し、土坑の約 3/4 は調査区外となるために全容は調査できなかった。1号土坑は1号ピットと重複し、ピットを切っている。土坑覆土の上層には、粘土層が最大約 0.09m の厚みで凸レンズ状に堆積している。形状は平面形が円形、断面形は鍋底形になり、底面は平坦である。規模は南北 (0.64m)、東西 (0.57m)、深さ 0.17m (確認面標高 30.783m) を測る。

2号土坑

調査区の中央部に位置し、北側で3号土坑に隣接する。形状は、平面形が東西に長軸をとる楕円形、断面形は浅い皿状を呈する。規模は長径 0.79m、短径 0.56m、深さ 0.09m (確認面標高 30.802m) を測る。

3号土坑

調査区北東部に所在し、2号土坑の北東部に隣接する。遺構の 1/2 は調査区外に広がる。形状は、

ピット

1号ピット

ピットは調査区南側、住居跡の南に位置する。ピットの南部 (1/2) は調査区外に広がる。ピットは2層下部から掘り込まれている。形状は平面形が隅丸方形、断面形は円錐形を呈し、規模は長径 0.56m、短径 (0.38m)、深さ 0.41m (確認面標高 31.068m) を測る。

ピットからは縄文土器 (1点)、須恵器 (3点) の計 4点、重量 57.3g が出土している。遺物はすべてが小片であり、時期を判定するのは困難である。

(8) T-7 調査区

本調査区は調査範囲の南東部にあり、C-2 調査区の南側に位置する。南北に長く設定した調査区である。調査区の規模は東西 1.55m、南北 2.41m、面積 3.73 m² である。調査区からは土坑 3基 (1~3号土坑) とピット 1基 (1号ピット) が検出されている。

T-7 調査区からは須恵器 (1点)、磁器 (1点) の計 2点、重量 7.6g が、調査区の表土中から出土している。遺物はいずれも小片であり、時期を判定するのは困難である。

平面形が東西に長軸を持つ長方形を呈し、断面形は浅い鍋底形である。規模は長径0.96m、短径(0.37m)、深さ0.12m(確認面標高30.802m)を測る。覆土は明黄褐色土層の上層に粘土を多量に含む層が、土坑を覆うように堆積している。土坑の底部は若干掘り過ぎの観があり、堆積している粘土層の下部が土坑底部である可能性も考えられる。

ピット

1号ピット

調査区の東部に位置し、ピットの約1/2は調査区外に広がっている。ピットは1号土坑と重複し、土坑に切られている。形状は平面形が円形、断面形は鍋底形を呈する。規模は長径0.42m、短径(0.30m)、深さ0.44m(確認面標高30.783m)を測る。

(9) T-8 調査区

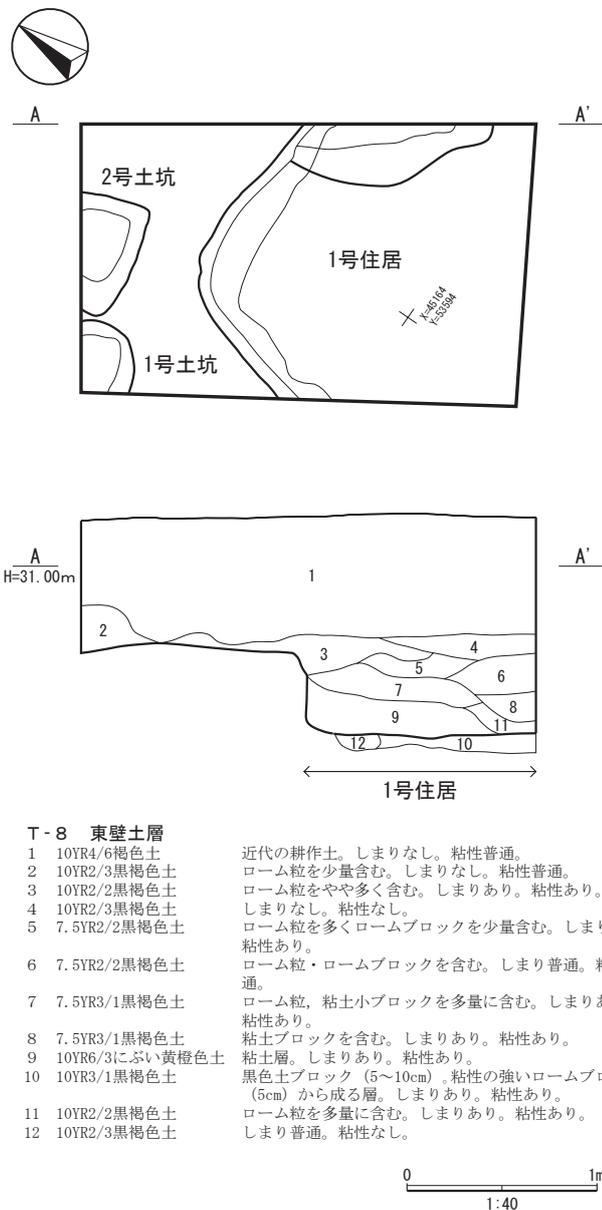
本調査区は、C-2調査区の北西に位置し、南北に長く設定した。調査区の規模は、東西1.47m、南北2.33m、面積3.42㎡である。調査区からは、住居跡1軒と土坑2基が検出されている。住居跡は、本遺跡第1次調査で確認された住居跡(001号遺構)と同一遺構であろうと推定した。

T-8調査区からは縄文土器(3点)、須恵器(4点)、土師器(6点)の計13点、重量101.9gが出土している。

住居跡

1号住居跡

調査区の南部に位置する。住居跡は北西部コーナーから南側が「く」字状に検出されたが、調査区が狭小なために住居跡の全容は不明である。住居跡は赤褐色土層から掘り込み、灰黄色粘土層に達している。形状は住居跡コーナー部から推定すると平面形が方形を呈する(長軸N-4°-E)。調査された規模は北壁の長さ1.00m、北西壁の長さ0.80mである。床面は深さ0.45m(確認面標高30.593m)を測る。床は灰黄褐色粘土ブロックと黒褐色土ブロックを混ぜた貼り床であり、床面の残存状態は良好である。貼り床の厚さは約



第16図 T-8調査区遺構図

第2表 ピット一覧

※備考の「○」印は工具痕が観察されるピット () 内は推定値

調査区	遺構番号	規模(単位=cm)			形状		確認標高(m)	出土遺物	備考
		長径	短径	深さ	平面形	断面形			
C-1	P2	40	36	20	円形	筒形	31.013	-	東側に攪乱
	P3	60	58	10	円形	鍋底形	31.101	-	
	P4	77	76	40	不整形	鍋底形	31.101	-	
	P5	62	61	30	台形	鍋底形	31.060	-	
	P7	74	71	37	円形	鍋底形	30.954	-	礎石と思われる石あり
	P10	47	45	26	方形	鍋底形	30.847	-	○
	P12	41	35	19	円形	鍋底形	30.770	-	
	P13	38	36	11	円形	鍋底形	30.763	-	
	P14	52	49	34	円形	鍋底形	30.954	-	
	P15	42	(30)	47	円形	鍋底形	30.954	-	西側に攪乱
C-2	P1	48	(30)	21	円形	鍋底形	30.428	-	○西部調査区外
	P2	42	40	33	円形	鍋底形	30.473	-	○
	P3	39	37	29	不整円形	鍋底形	30.473	-	○
	P4	42	41	46	円形	鍋底形	30.473	-	○
	P5	42	32	44	瓢箪形	鍋底形	30.506	-	○
	P6	44	36	40	不整形	鍋底形	30.572	-	○
	P7	26	(24)	29	方形	鍋底形	30.572	-	○北部調査区外
	P8	52	44	27	円形	鍋底形	30.572	-	○
	P9	58	49	35	不整形	鍋底形	30.525	-	○
	P10	28	25	24	方形	鍋底形	30.525	-	○
	P11	(32)	29	37	方形	鍋底形	30.374	-	○P26と重複
	P12	47	44	30	円形	鍋底形	30.489	須恵器	○P24と近接
	P13	49	42	35	円形	鍋底形	30.452	-	○
	P14	44	41	26	円形	鍋底形	30.427	-	○
	P15	(24)	(22)	27	円形	鍋底形	30.472	-	○P25と重複
	P16	37	36	31	円形	鍋底形	30.381	-	○
	P17	47	45	23	不整形	鍋底形	30.420	-	○
	P18	46	(22)	(28)	不整形	筒形	30.525	-	○南東部調査区外
	P19	(37)	(30)	25	円形	鍋底形	30.542	-	○南東部調査区外
	P20	57	44	40	楕円形	鍋底形	30.380	-	○
	P21	56	(19)	?	方形	筒形	30.380	-	○南部調査区外
	P22	36	31	33	円形	鍋底形	30.395	-	○
	P23	27	25	13	不整円形	鍋底形	30.473	-	○
	P24	31	28	18	円形	鍋底形	30.489	-	○P12と近接
	P25	26	(22)	34	方形	筒形	30.472	-	○P15と重複
	P26	(45)	34	30	楕円形	皿状	30.374	-	○P11と重複
	P27	30	(28)	5	円形	皿状	30.420	-	
	P28	30	(25)	5	円形	皿状	30.463	-	南部調査区外
T-1	P1	24	(18)	21	円形	円錐形	30.602	-	西部調査区外
	P2	31	(17)	13	円形	円錐形	30.502	-	西部調査区外
	P3	32	23	27	楕円形	円錐形	30.534	-	北西方向に傾斜
	P4	25	23	14	円形	鍋底形	30.496	-	
T-2	P1	24	22	22	円形	円錐形	30.739	-	
	P2	28	26	11	円形	鍋底形	30.790	-	
	P3	36	(14)	6	楕円形	鍋底形	30.739	-	東部調査区外
	P4	18	(14)	18	円形	鍋底形	30.799	-	北部調査区外
T-5	P1	54	52	31	円形	鍋底形	30.970	須恵器 土師器	西・東側に攪乱
	P2	(35)	(34)	20	方形	鍋底形	30.912	-	南西部調査区外
T-6	P1	56	(38)	41	隅丸方形	円錐形	31.068	縄文土器 須恵器	南部調査区外
T-7	P1	42	(30)	44	円形	鍋底形	30.783	-	1号土坑と重複し切られている

0.10m を測り、掘り方の底面は比較的平坦である。竈や柱穴・壁周溝等は検出できなかったが、調査区東部の床面上に、竈から流失したと思われる粘土層が幅 0.34m、厚さ 0.23m、長さ 0.99m で検出されている。粘土層の直下から土師器胴部破片が出土している。

1号住居跡は前述したように、第1次調査時に検出された001号遺構と同一の遺構と思われたが、平面図上の位置関係や長軸方向(N-2°-W)等がわずかに異なる。測量等の誤差であることも考えられるが、異なる遺構である可能性も否定できない。

遺物は縄文土器(2点)、須恵器(10点)、土師器(20点)、灰釉陶器(1点)の計33点、重量414.4gが出土している。

本住居跡の廃絶年代は、出土遺物から8世紀後半から9世紀前半に比定される。

土坑

1号土坑

調査区北西部に位置し、土坑の3/4は調査区外に広がっており、土坑の全容は不明である。土坑は2層下部から掘り込まれ、赤褐色土層を掘り込み粘土層に達している。形状は平面形が円形、断面形は皿状となっている。規模は長径(0.34m)、短径(0.25m)、深さ0.08m(確認面標高30.559m)を測る。

2号土坑

調査区北部に位置し、土坑の約1/2は調査区外となり、北西方に広がっている。土坑は2層下部から赤褐色土層を掘り込み粘土層に達している。形状は平面形が方形、断面形は皿状を呈している。規模は長径0.63m、短径(0.35m)、深さ0.10m(確認面標高30.547m)を測る。

3-4 遺物

今回の調査地点からは、須恵器・土師器・陶磁器・金属製品・石製品・瓦等が出土している。その出土量は少なく、コンテナ1箱にも満たない量である。出土点数は総数248点、総重量は3,670.9gである。

遺物の内訳は、縄文土器7点・96g、須恵器96点・1,103.8g、土師器112点・944.9g、灰釉陶器7点・71.1g、石製品(砥石)1点・434.1g、陶磁器11点・138.2g、金属製品(鉄鏃)1点・11.8g、瓦13点・871gである。奈良・平安時代の須恵器・土師器が主体であり、全体の88%を占める。遺物は小片が多く、時期の判定を行うには困難な遺物が多くを占める。

(1) T-6・1号住居跡出土遺物

本住居跡からは須恵器5点・170.3g、土師器9点・159.5g、砥石1点・434.1g、鉄鏃1点・11.8g、瓦1点・219g、計17点・994.7gが出土している。小片が多く、図化できたのは須恵器、土師器、砥石、鉄鏃、瓦各1点である。

第17図1は住居跡覆土5層から出土した須恵器蓋であり、約2/3の残存率である(第14図P1)。口縁部の形状や摘部が擬宝珠状であること等から7世紀末～8世紀初頭に比定される。胎土に白色粒を少量、黒色粒を微量含む。色調は内外面ともに2.5Y7/2灰黄色を呈する。2は覆土4層から出土した土師器坏の底部1/3破片である(第14図P4・5接合遺物)。坏の底部は丸底であり、成形は外面が手持ちヘラ削り、内面はナデ成形である。体部から底部外面には赤彩が施される。胎土に雲母を極

微量含み、色調は内外面ともに10YR7/3にぶい黄橙色である。坯の形状から8世紀前半に比定されよう。3は覆土から出土した軒平瓦である(第14図K3)。凹面布目叩きの後ヘラ削り、凸面は一辺が5mmの正格子叩きの瓦である。胎土に白色粒を微量含み、色調は7.5YR6/6橙色を呈する。4は覆土4層から出土した鉄鏝の頸部から茎部の破片である(第14図F4)。茎部に棘関を有する。残存長12.8cm、断面1辺が0.6cmの方形である。5は覆土4層から出土した砥石の端部破片である(第14図S5)。砥石の使用面は欠損した面を除いた5面である。砥石の使用面に、細い鉄製品を研いだと思われる条痕が多数観察される。砥石の石材は泥岩である。

(2) T-8・1号住居跡出土遺物

本住居跡からは縄文土器2点・22.7g、須恵器10点・95.6g、土師器20点・280.1g、灰釉陶器1点・16.0g、計33点・414.4gが出土している。

縄文土器の時期は、縄文時代中期後半に比定される小破片である。縄文土器はいずれも覆土から出土した。第17図7は外面にRL短節縄文を斜位回転施文、内面はナデ成形である。外面は10YR2/1黒色、内面は10YR4/2灰黄褐色を呈する。胎土にチャートを少量含んでいる。8は胴部下半の部位である。扁平な隆帯が垂下する。内面は丁寧なナデ成形である。外面は7.5YR6/3にぶい褐色、内面は10YR6/4にぶい黄橙色を呈し、胎土に石英粒を含む。9は住居跡覆土から出土した須恵器坯の底部1/4破片である。底部回転ヘラ切り、内外面ナデによる成形、色調は外面5YR4/2灰褐色、内面7.5YR5/2灰褐色を呈し、胎土に白色粒少量、砂粒微量を含み、海綿骨針が観られることから、木葉下窯跡群産の須恵器と考えられる。10は住居跡覆土から出土している須恵器坯の底部1/4破片である。底部手持ちヘラ切り、内外面ロク口水挽き成形、色調は内外面とも7.5YR5/1褐灰色を呈する。底部外面から体部の一部に煤が付着する。胎土は白色粒・チャート少量を含み、海綿骨針が観られる。11は住居跡覆土から出土した須恵器坯の口縁部1/8破片である。内外面ともにロク口水挽きによる成形、口唇部にわずかな赤彩痕が観られる。色調は内外面とも7.5YR5/1褐灰色を呈する。胎土は白色粒少量、チャートを微量含む。9・10・11は木葉下窯跡群産の須恵器であると推定されることから8世紀後半に比定される。12は住居跡覆土から出土した須恵器口縁部1/9破片である。口縁部が「く」字に内湾し、口唇部は緩やかに外反する。器形は盤形土器であると推定されることから9世紀前半に比定される。内外面はロク口水挽きによる成形、色調は内外面ともに5YR3/3暗赤褐色を呈する。口縁部内面に灰釉が点在する。胎土に砂粒が微量に含まれる。海綿骨針は観られない。13は住居跡覆土から出土した土師器甕の頸部1/5破片である。口縁部は「く」の字に外反する。頸部外面はナデ、胴部は縦位のヘラ削り、内面はナデによる成形、色調は内外面ともに5YR6/6橙色である。胎土は白色粒を少量とチャートを含む。

未掲載の遺物であるが、竈から流出したと推定される粘土堆積層の下から土師器の甕の胴部破片が出土している。胴部破片であり時期の判断は困難である。外面は黒褐色で一部に煤の付着が観察され、内面は暗褐色である。外面の成形は幅の狭いヘラ状工具を用いたミガキであり、内面は横ナデである。胎土は白色粒・チャートを多く含む。

(3) T-6・1号ピット出土遺物

第17図6はピットの覆土から出土した土師器壺類の頸部破片である。口縁部は緩やかに外反する。口縁部外面は刷毛状工具による横ナデ、内面は横ナデによる成形である。ナデによる成形後に内外面から指頭による圧痕が観られる。内面に赤彩痕が観られる。胎土は砂粒と白色粒が含まれる。色調は外面10YR3/2黒褐色、内面7.5YR5/4にぶい褐色を呈する。

(4) その他の出土遺物

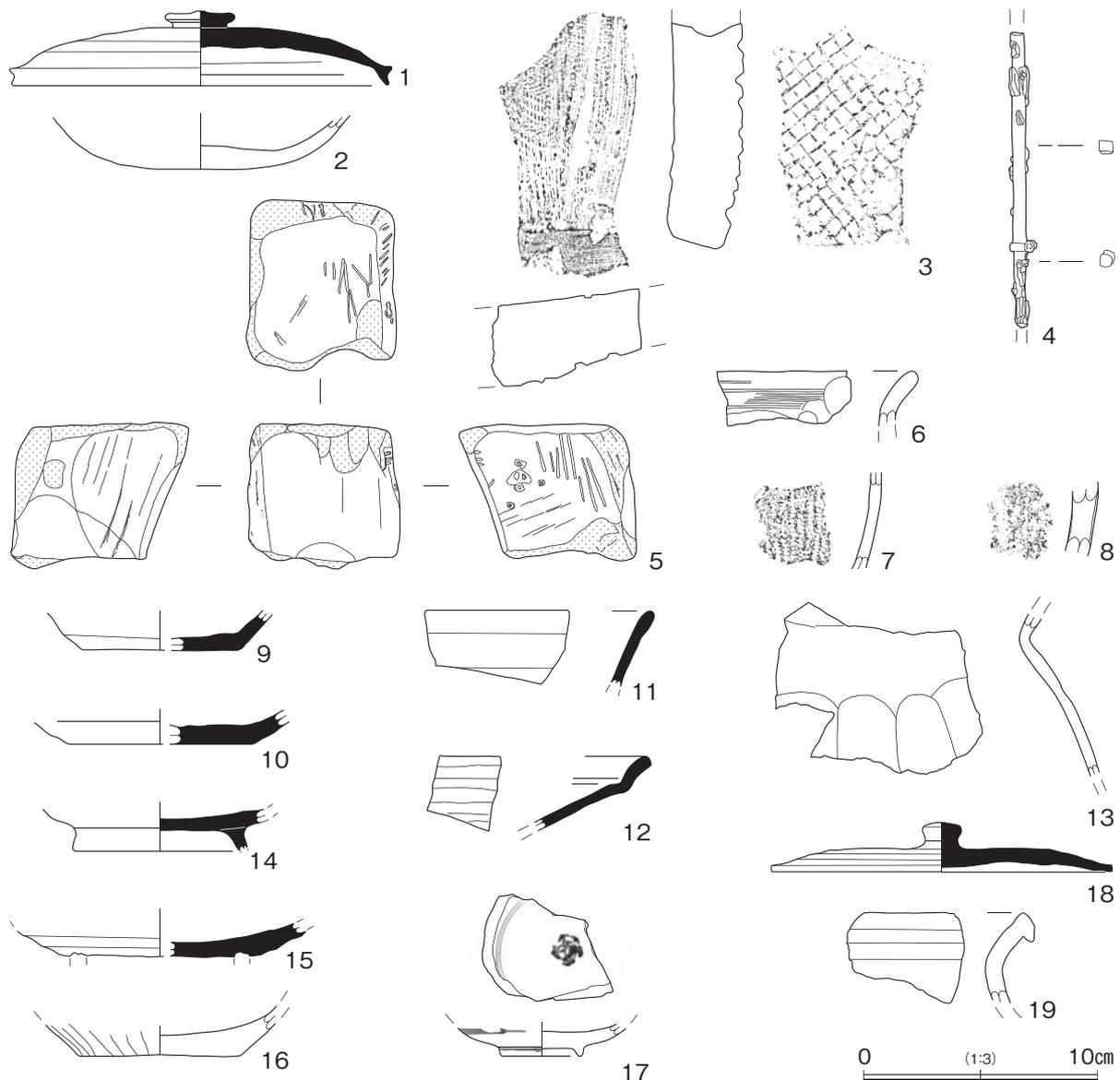
14はC-1調査区一括遺物で、須恵器高台付坏の底部1/3破片である。底部は回転ヘラ削り後に高台を貼り付ける。胎土は白色粒を少量含む、色調は内外面ともに5YR6/2灰褐色を呈する。15はT-3調査区一括遺物で、須恵器高台付盤の底部1/3破片である。底部は回転ヘラ削り後に高台部に溝を造り、高台を貼り付ける。内外面ともに横ナデによる成形を行う。色調は7.5YR5/1褐灰色を呈する。16はT-3調査区一括遺物であり、土師器甕の底部1/4破片である。底部は不規則な敷物痕、胴部下端は縦位のヘラ削り、内面は雑なヘラナデである。胎土には雲母が観られ、白色粒中量とチャート多量を含む。色調は内外面5YR5/4にぶい赤褐色を呈する。17はT-3調査区一括遺物であり、磁器碗の底部破片である。見込みと高台内に二重圏線が観られ、見込み内に五弁花が絵付けされている。胎土は乳白色である。18世紀に比定される。18はT-4調査区一括遺物で、須恵器蓋の摘から天井部が残存する1/4破片である。蓋の中央部がわずかに下がり、摘は径が小さく高さがありボタン状である。外面は回転ヘラ削り、内面はナデによる成形を施す。口縁部外面に灰釉が観られる。胎土は砂粒を微量に含む。色調は内外面2.5Y6/2灰黄色を呈する。蓋の形状から8世紀後半に比定されよう。19はT-4調査区の一括遺物であり、土師器甕の口縁部1/8破片である。口唇部は折り返し、下方に摘み出している。外面は横ナデ、内面は刷毛状工具によるナデ成形をしている。外面に赤彩痕が確認される。胎土はチャート・白色粒を少量含む。色調は内外面ともに2.5YR5/4にぶい赤褐色を呈する。

(渡辺)

第3表 出土遺物属性一覧

図版 番号	出土地点 遺構	種別	器種	残存 部位	口径 (推定) (cm)	底径 (推定) (cm)	器高 (推定) (cm)	重量 (g)	特徴・手法	胎土	海綿 骨針	焼成	色調	備考
1	T-6 SI01	須恵器	蓋	天井部 破片	16.4	-	3.2	162	外面天井部上位回転ヘラ削り、 下位・内面横ナデ	白色粒少量・ 黒色粒微量	-	良	内外面：2.5Y7/2 灰黄色	7世紀末～ 8世紀初頭
2	T-6 SI01	土師器	坏	底部破片	-	(5)	(2.7)	86	外面ヘラ削り後ナデ、内面ナデ、 底部外面手持ちヘラ削り	雲母極微量	-	良	内外面：10YR7/3 にぶい黄褐色 底部外面に赤彩 痕	底部丸底 8世紀前半
3	T-6 SI01	瓦	平瓦		(6.3)	-	(1.2)	219	凹面布目→ヘラ削り、 凸面正格子叩き	白色粒微量	-	良	7.5YR6/6 橙色	正格子叩き
4	T-6 SI01	鉄製品	鉄鏃	茎部	(12.8)	-	0.6	12	-	-	-	-	-	棘関あり
5	T-6 SI01	石製品	砥石	端部破片	6.4	6.1	6	434	材質泥岩、 使用面5面	白色粒微量	-	-	7.5YR8/1 灰白色	使用面5面
6	T-6 P1	土師器	壺	口縁部 破片	-	-	(2.4)	17	内面ナデ・赤彩痕あり、外面刷 毛状工具による横ナデ、内外面 に指頭痕	砂粒・白色粒 含む	-	普	内面：7.5YR5/4 にぶい褐色 外面：10YR3/2 黒褐色	
7	T-8 SI01	縄文	深鉢	小破片	-	-	-	12	RL短節縄文斜位回転施文、 内面ナデ	チャートを少 量含む	-	普	内面：10YR4/2 灰黄褐色 外面：10YR2/1 黒色	
8	T-8 SI01	縄文	?	〃	-	-	-	10	扁平な隆帯が垂下する。 内面は丁寧なナデ	石英粒含む	-	普	内面：10YR6/4 にぶい黄褐色 外面：7.5YR6/3 にぶい褐色	
9	T-8 SI01	須恵器	坏	底部破片	-	(6.6)	(1.6)	19	底部ヘラ削り、 内外面ナデ	白色粒少量・ 砂粒微量・海 綿骨針含む	○	良	内面：7.5YR5/2 灰褐色 外面：5YR4/2 灰褐色	木葉下窓跡産 8世紀後半

図版番号	出土地点 遺構	種別	器種	残存 部位	口径 (推定) (cm)	底径 (推定) (cm)	器高 (推定) (cm)	重量 (g)	特徴・手法	胎土	海綿 骨針	焼成	色調	備考
10	T-8 SI01	須恵器	坏	底部破片	-	(8.0)	(1.5)	29	底部手持ちヘラ削り、内外面ロク口水挽き成形、底部・体部の一部にスス付着	白色粒・チャート少量・海綿骨針含む	○	良	内外面：7.5YR5/1 褐灰色	木葉下窯跡産 8世紀後半
11	T-8 SI01	須恵器	坏類	口縁部破片	(13.6)	-	(3.1)	15	内外面ロク口水挽き成形、口唇部の一部に赤彩痕	白色粒・チャート微量	○	良	内外面：7.5YR5/1 褐灰色	木葉下窯跡産 8世紀後半
12	T-8 SI01	須恵器	盤	口縁部破片	-	-	(3.3)	13	内外面ロク口水挽き成形、口縁部内面に灰軸が点在	砂粒微量	-	良	内外面：5YR3/3 暗赤褐色	9世紀前半
13	T-8 SI01	土師器	甕	頸部破片	-	-	(7.0)	38	頸部外面ナデ、胴部縦位ヘラ削り、内面ナデ	白色粒少量とチャート含む	-	普	内外面：5YR6/6 橙色	
14	C-1 一括	須恵器	高台付 杯	底部破片	-	(7.4)	-	36	底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け、内面ナデ	白色粒・砂粒	-	普	内外面：5YR6/2 灰褐色	
15	T-3 一括	須恵器	高台付 盤	底部破片	-	(7.6)	-	45	底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け用の溝を切る。内外面横ナデ	白色粒少量・チャート中量	○	良	内外面：7.5YR5/1 褐灰色	木葉下窯跡産 8世紀後半
16	T-3 一括	土師器	甕	底部破片	-	(6.8)	(2.1)	31	底部に不規則な敷物痕、胴部下端は縦位のヘラ削り、内面は粗雑なヘラナデ	雲母・白色粒中量・チャート多い	-	普	内外面：5YR5/4 にぶい赤褐色	
17	T-3 一括	磁器	碗	底部破片	-	(3.5)	(1.9)	26	見込み二重圏線・五弁花(絵付け)高台縁二重圏線	乳白色	-	良	青磁・文様不明	18世紀
18	T-4 一括	須恵器	蓋	天井部破片	(14.4)	-	(2.0)	58	外面天井部上位は回転ヘラ削り、内面はナデ、摘みは径1.6cm・高1cmボタン状である。口縁部外面に灰軸(幅0.7cm)	砂粒微量	-	良	内外面：2.5Y6/2 灰黄色	8世紀後半
19	T-4 一括	土師器	甕	口縁部破片	-	-	(3.9)	22	内外面横ナデ成形、外面に赤彩跡観られる	白色粒・チャート少量	-	良	内外面：2.5YR5/4 にぶい赤褐色	



第17図 出土遺物

第4章 総括

本調査地点は、常陸国内で最も古くに建立された寺院として知られている、国指定史跡台渡里廃寺跡の西方約300mに位置し、観音堂山地区に隣接する。観音堂山地区は7世紀第IV四半期から8世紀第IV四半期まで寺院の造営が行われ、その後火災により消失している。台渡里廃寺跡南方地区に9世紀第III四半期頃から寺院の造営が開始されたが、10世紀第I四半期頃には未完成のまま廃絶している。

今回の調査地点は堀遺跡の東端部に位置する。調査区域は宅地造成に伴う道路（2箇所）および雨水貯留槽（8箇所）の設置予定地であり、各調査区の面積は道路予定地が120㎡、雨水貯留槽設置予定地が33㎡、調査区の総面積は153㎡である。今回の調査地点は、平成17（2005）年に行われた本遺跡第1次調査地点を囲む形で設定された。

今回の調査で検出された遺構は、住居跡2軒・土坑7基・ピット50基である。

2軒の住居跡は雨水貯留槽設置予定地から検出されており、調査範囲が狭小であるために住居跡の全容は確認できなかった。2軒の内1軒（T-6・SI01住居跡）は、本遺跡第1次調査時に検出された006号遺構の未調査部分である。他の1軒（T-8・SI01号住居跡）も第1次調査で検出された001号遺構の未調査部分である可能性を含んでいるが、第1次調査と今回調査の平面図を重ね合わせたところ、住居跡の位置と軸方向に多少の差異はあるものの、T-8・SI01住居跡と001号遺構は同一遺構と考えられる。

T-6・SI01住居跡の廃絶時期は、須恵器蓋等の出土遺物から推定すると8世紀前半に比定される。T-8・SI01住居跡は出土遺物から推定すると、T-6・SI01住居跡よりやや新しく8世紀後半から9世紀前半の時期に廃絶していると推定される。調査した2軒の住居跡の時期は、観音堂山地区の寺院造営期とはほぼ重複していること、T-6・SI01住居跡から鉄鏝が出土しているなど、寺院の維持・運営に関わる集落の一部である可能性をも含んでいる。

今回の調査では、前述したように調査区北西部では住居跡は検出されておらず、住居跡は調査区南東部に集中しているように思える（第6図参照）。C-1調査区の北部ではローム層は観察されず、下層に灰黄褐色粘土層、粘土層の上層に赤褐色砂質土層、その上にはにぶい黄褐色砂質土層の順で堆積している。赤褐色砂質土層の成立過程を想定すると次のように推定できる。粘土層の上面を地下水が流れ、まず土を洗い流し砂質土層を形成する。地下水は多量の鉄分を含み、鉄分が砂質土と結合し、酸化したものと考えられる。鉄分は弁柄の原材料となる第二酸化鉄であろう。さらに、本遺跡の北を流れる那珂川や田野川の浸食等によって形成された小支谷も、今回調査地点の北側に入り込んでいたとの話も地域住民から伺っている。これらのことを踏まえて、想定が正しければ当該地は湿地同然の状態であったと考えられる。したがって、当該地は居住するにはやや不適切な土地であったと思われるが、8世紀前半から9世紀代のある程度長期にわたる土地利用が行われた。

C-2調査区の各ピットは、ピット側壁に残る工具痕から扁平な鋤状工具で掘り込まれていると考えられる。同様な工具を使用していることから、長い時間を要して掘り下げられたピットではなく、比較的短期間で掘り下げられたのではなかろうか。ピットの形状には多少の変化はあるものの、平面

形は円形に近く、断面形は鍋底形を呈するなど類似点が観られる。ピット群の規則的な配列は、3列を確認した。3列とも3箇所ピットで構成され、この3列に対応するピット列は確認できず、建物跡を想定することはできなかった。調査範囲が狭いこともあり、ピット列は調査区外で検出される可能性を否定するものではない。これらのピットは隣接する国指定史跡台渡里廃寺跡と何らかの関連を持つ遺構であることも推察できよう。

(渡辺)

引用・参考文献

- 井 博幸・小宮山達夫 1999 「第7章 内原町周辺的主要古墳と出土遺物 水戸市愛宕山古墳」『牛伏4号墳の調査』内原町教育委員会
- 伊藤重敏 1975 『常陸考古学研究所学報第16集 Site No.6181 水戸地方における古代窯業の研究(その2) 水戸市田谷廢寺跡出土古代瓦雑考』常陸考古学研究所
- 伊藤廉倫 1995 『茨城県水戸市 堀遺跡-住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』水戸市教育委員会
- 井上義安 1992 『水戸市アラヤ遺跡 北部地区老人福祉センター・デイサービスセンター建設に伴う埋蔵文化財の調査報告書』水戸市アラヤ遺跡調査会
- 井上義安・千葉隆司 1995 『水戸市台渡里廢寺跡』水戸市台渡里廢寺跡発掘調査会
- 井上義安・千葉隆司・樫村宣行 1995 『水戸市堀遺跡 堀町住宅団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市堀遺跡発掘調査会
- 井上義安・蓼沼香未由・仁平妙子・根本陸子 1998 『水戸市埋蔵文化財分布調査報告書(平成10年度版)』水戸市教育委員会
- 茨城県教育庁文化課 2001 『茨城県遺跡地図』茨城県教育委員会
- 茨城県立歴史館 1995 『茨城県史 考古資料編 奈良・平安時代』茨城県
- 大森信英 1952 「渡里村大字渡里字アラヤ遺蹟予備調査に於ける報告」『茨城高等学校史学部紀要』第一号 茨城高等学校史学部
- 1974 「69 権現山下横穴群」『茨城県史料 考古資料編 古墳時代』茨城県
- 樫村宣行 1993 『茨城県教育財団調査報告書第82集 (仮称)水戸浄水場予定地内埋蔵文化財調査報告書 白石遺跡』財団法人茨城県教育財団
- 2005 「堀遺跡」『茨城県考古学協会シンポジウム 古代地方官衙周辺に於ける集落の様相-常陸国河内郡を中心として-』茨城県考古学協会
- 川口武彦 2006 「範囲確認調査の成果」『国指定記念シンポジウム 台渡里廢寺跡を考える 資料集』水戸市教育委員会
- 川口武彦・小松崎博一・新垣清貴編 2005 『台渡里廢寺-範囲確認調査報告書-』水戸市教育委員会
- 川口武彦・色川順子 2009 『平成18年度水戸市内遺跡発掘調査報告書』水戸市埋蔵文化財調査報告第22集 水戸市教育委員会
- 2010 『平成19年度水戸市内遺跡発掘調査報告書』水戸市埋蔵文化財調査報告第32集 水戸市教育委員会
- 瓦吹 堅 1991 「水戸市台渡里廢寺覚書Ⅲ-観音堂山・南方・長者山地区の性格について-」『姿良岐考古』13 姿良岐考古同人会
- 川崎純徳 1982 『茨城の装飾古墳』新風土記社
- 黒澤彰哉 1998 「常陸国那賀郡における寺と官衙について」『茨城県立博物館報』25 茨城県立歴史館
- 佐々木藤雄・川口武彦・大橋 生・林 邦雄・渥美賢吾 2006 『台渡里廢寺跡』水戸市埋蔵文化財調査報告第4集 水戸市教育委員会
- 佐々木藤雄・川口武彦・関口慶久・新垣清貴・渥美賢吾・木本挙周・林 邦雄・小野麻人・市瀬俊一・大橋 生 2007 『アラヤ遺跡(第2地点) 市道常磐10号線道路改工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市埋蔵文化財調査報告第12集 水戸市教育委員会
- 佐々木藤雄・林 邦雄・川口武彦・渥美賢吾・関口慶久 2008 『渡里町遺跡(第5地点) 市道常磐31号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市埋蔵文化財調査報告第16集 水戸市教育委員会
- 高井佛三郎 1964 『常陸台渡里廢寺跡・結城八幡瓦窯跡』茨城県教育委員会
- 外山泰久 1994 「アラヤ前遺構(水戸市渡里町)をめぐって」『常総の歴史』13 嵩書房
- 生田目和利・稲田健一 2002 「茨城県」『第51回 埋蔵文化財研究集会 装飾古墳の展開-彩色系装飾古墳を中心に- 資料集』埋蔵文化財研究会・九州国立博物館誘致推進本部・福岡県教育委員会
- 吹野富美夫・江幡良雄 1998 「水戸市軍民坂遺跡出土の搔器」『常総台地14 川崎順徳先生還暦記念号』常総台地研究会
- 藤村達巳・塩谷 修 1982 「第2章 調査報告(1)古墳群の立地と環境」『常陸安戸星古墳』水戸市教育委員会
- 渡辺俊夫 1981 「第5章 砂川遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告書第XVI 常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書4 宮部遺跡 鹿の子A遺跡 砂川遺跡』財団法人茨城県教育財団

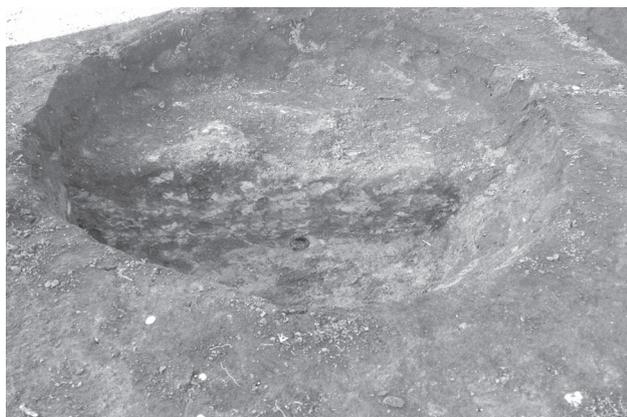
写 真 图 版



調査前 (東より)



C-1 調査区全景 (南より)



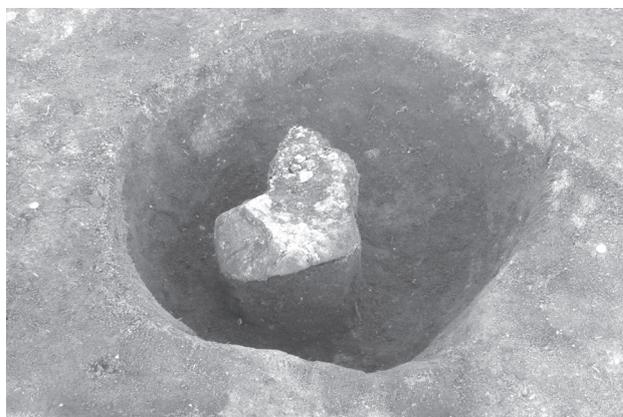
C-1 1号土坑粘土断面 (南より)



C-1 1号土坑完掘 (南より)



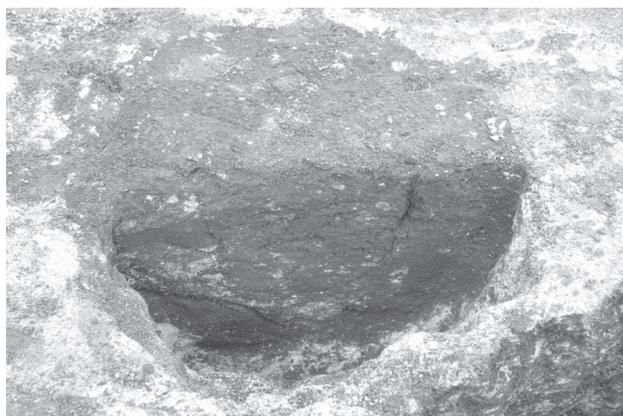
C-1 7号ピット断面 (西より)



C-1 7号ピット石検出状況 (南より)

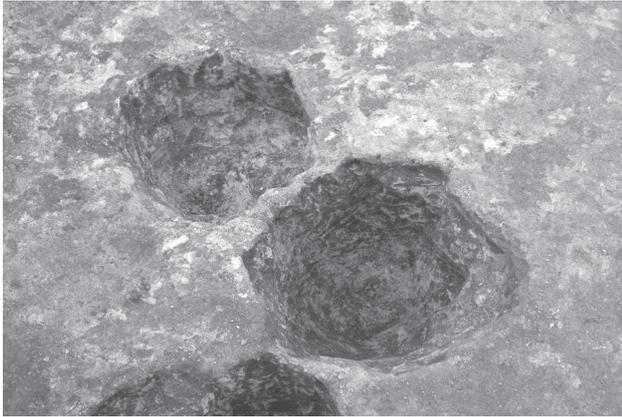


C-2 調査区全景 (西より)

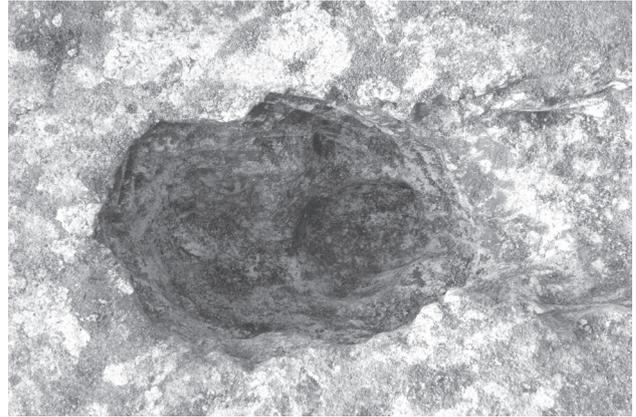


C-2 3号ピット断面 (南より)

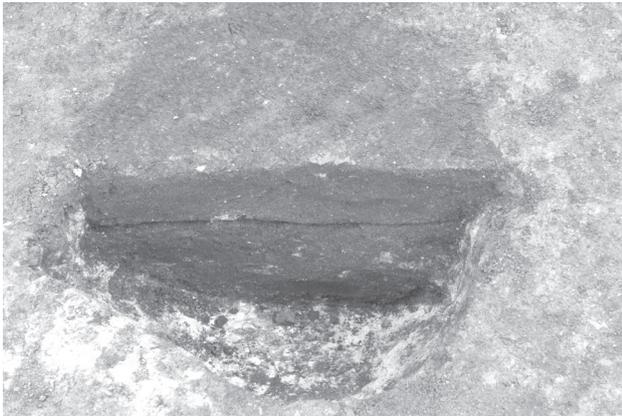
図版2



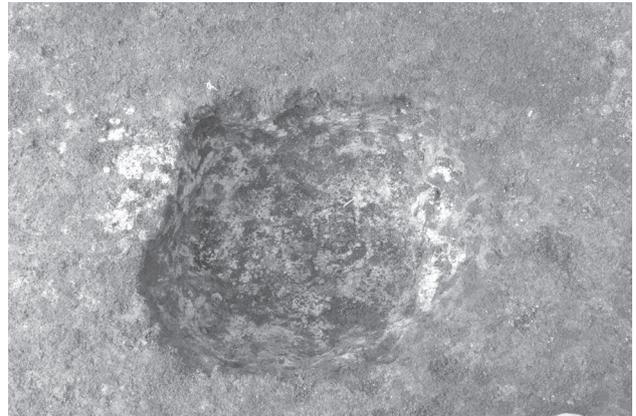
C-2 3号(左)・4号(右)ピット完掘 (南より)



C-2 12号ピット完掘 (南より)



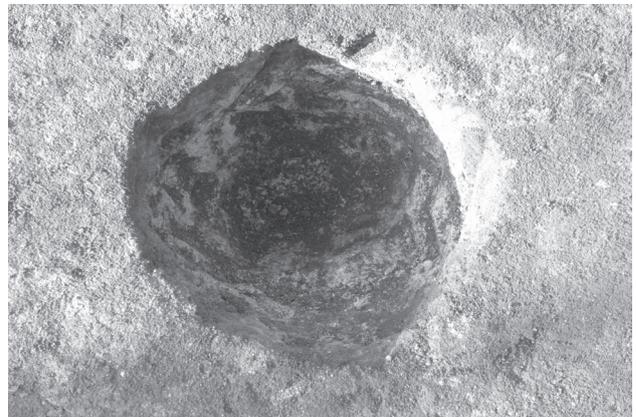
C-2 14号ピット断面 (南より)



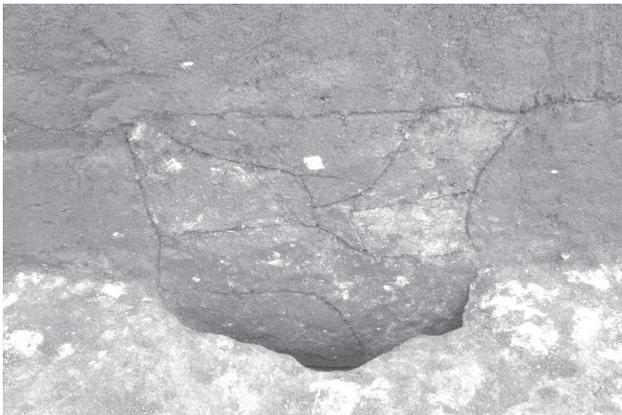
C-2 14号ピット完掘 (南より)



C-2 15号(左)・25号(右)ピット完掘 (西より)



C-2 16号ピット完掘 (南より)



C-2 18号ピット断面 (北より)



T-1 調査区全景 (北より)



T-2 調査区全景 (北より)



T-3 調査区全景 (西より)



T-4 調査区全景 (南東より)



T-5 調査区全景 (南より)



T-5 2号ピット完掘 (東より)



T-6 調査区全景 (南より)



T-6 1号住居跡全景 (西より)



T-6 1号住居跡遺物出土状況 (17図-1 南より)

図版4



T-6 1号住居跡遺物出土状況 (17 図-4 南より)



T-7 調査区全景 (南東より)



T-7 1号土坑・1号ピット完掘 (西より)



T-8 調査区全景 (南東より)



T-8 1号住居跡北東壁土層 (南西より)



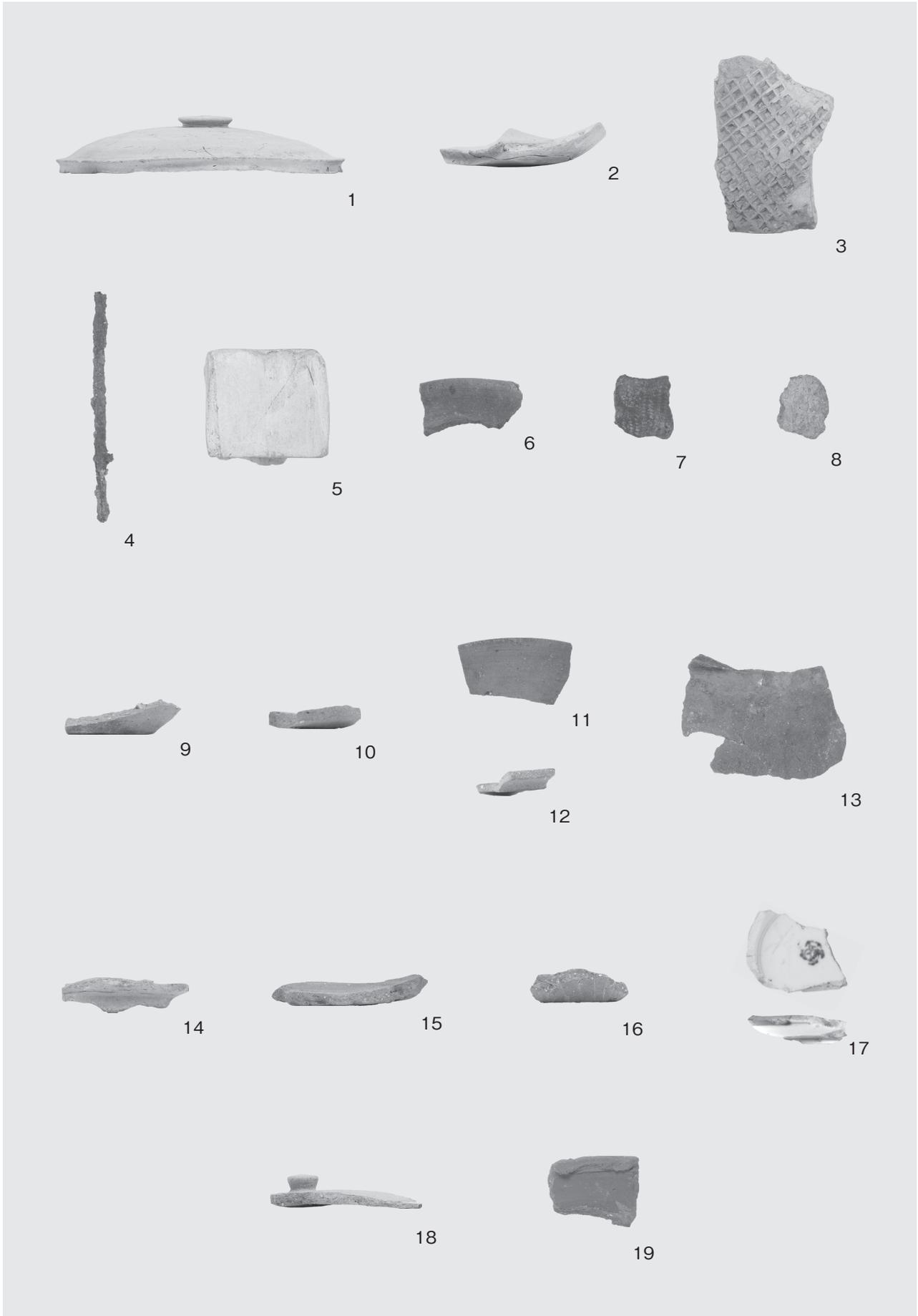
T-1 基本土層断面 (南より)



T-4 基本土層断面 (南東より)



調査区埋戻し状況



出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	ほりいせき（だいさんちてんだいにじちょうさ）							
書名	堀遺跡（第3地点第2次調査）							
副書名	宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	水戸市埋蔵文化財調査報告第39集							
編集者名	渡辺久生							
著者名	渥美賢吾・川口武彦・松浦文昭・渡辺久生							
発行機関	水戸市教育委員会							
所在地	〒310-8610 茨城県水戸市中央1-4-1 ☎029-224-1111							
発行年月日	2011（平成23）年1月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
ほりいせき 堀遺跡	みとしわたりちようあぎこう 水戸市渡里町字高 野台 3231 番外	08201	64	36° 24' 20"	140° 25' 50"	2010.1.18 ～ 2010.1.30	153 m ²	宅地造成工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
堀遺跡	集落跡	縄文		縄文土器		<p>今回の調査では、第1次調査で所在が確認されていた住居跡2軒とピットが50基・土坑7基が検出された。</p> <p>C-1調査区から北の調査区域では、住居跡は検出されず、ピットや土坑等の遺構も少ない。C-1調査区の南と東から住居跡やピット群が検出されている。</p> <p>C-2調査区のピット群では、工具痕が観察されている。ピット群には直線的かつ等間隔に並ぶピット列が3列観られるが、これらのピット列に対応するピット列は未確認である。</p> <p>住居跡の検出範囲やピット群の存在などは、古代から中世の土地利用を考察してゆく上での一助であろう。</p>		
		奈良・平安	住居跡2軒・土坑7基 ピット50基	土師器・須恵器・瓦・鉄製品・石製品				
		中世		磁器				

※北緯・東経は世界測地系。

項目	遺物の取り扱い
水洗い	・すべて行った。
注記	・手書きによる。 例) ミ-64-3・2次-T6・1住 No3のように注記した。
接合	・接合は必要に応じて行った。
実測	・遺物実測図は報告書掲載分についてのみ作成した。
台帳	・遺物台帳、図面台帳、写真台帳があり、検索が可能なように作成している。合計1冊（綴り）。
遺物保管方法	・出土遺物は、報告書使用と未使用に分け、遺物収納箱に納めた。各箱には収納内容を明記している。なお、未使用分については種別毎に分類、収納してある。

水戸市埋蔵文化財調査報告

第1集	台渡里廃寺跡 —範囲確認調査報告書—	2005年3月発行
第2集	台渡里廃寺跡 —市道常磐17号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)—	2005年4月発行
第3集	大鋸町遺跡 —グランディヒルズ元吉田造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2005年8月発行
第4集	台渡里廃寺跡 —市道常磐17号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)—	2006年3月発行
第5集	台渡里遺跡 —集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2006年3月発行
第6集	吉田古墳Ⅰ —史跡整備計画に伴う吉田古墳群第3次調査報告書—	2006年3月発行
第7集	大鋸町遺跡(第3地点) —市道浜田207号線側溝新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2006年3月発行
第8集	坏遺跡(第3地点) —ヴィヴァンコート赤塚建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2007年3月発行
第9集	坏遺跡(第4地点) —プランタンコリーヌⅡ建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2007年3月発行
第10集	吉田古墳Ⅱ —史跡整備計画に伴う吉田古墳群第1号墳の第3次発掘調査報告書—	2007年3月発行
第11集	平成17年度水戸市内遺跡発掘調査報告書	2007年3月発行
第12集	アラヤ遺跡(第2地点) —市道常磐10号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2007年3月発行
第13集	米沢町遺跡(第5地点) —住宅展示場建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2007年3月発行
第14集	大串遺跡(第7地点) —介護老人保健施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2008年3月発行
第15集	台渡里遺跡(第39次調査) —公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2008年3月発行
第16集	渡里町遺跡(第5地点) —市道常磐31号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2008年6月発行
第17集	渡里町遺跡(第6地点) —市道常磐34, 275号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2008年6月発行
第18集	薄内遺跡 —移動体通信基地局建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2008年8月発行
第19集	堀遺跡(第9地点) —宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2008年9月発行
第20集	元石川大谷原遺跡 —宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2008年12月発行
第21集	台渡里1 —平成18年度長者山地区範囲確認調査概報—	2009年3月発行
第22集	平成18年度水戸市内遺跡発掘調査報告書	2009年3月発行
第23集	吉田古墳Ⅲ —史跡整備計画に伴う吉田古墳群第1号墳の第4・5次発掘調査報告書—	2009年3月発行
第24集	町村遺跡(第1地点) —共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2009年3月発行
第25集	東組遺跡(第1地点) —物販店舗建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2009年3月発行

第 26 集	荷鞍坂遺跡 (第 1 地点) —コンビニエンスストア建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2009 年 3 月発行
第 27 集	大鋸町遺跡 (第 8 地点) —宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2009 年 3 月発行
第 28 集	雁沢遺跡 (第 1 地点) —工場建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2009 年 3 月発行
第 29 集	渡里町遺跡 (第 7 地点) —市道常磐 23, 31, 307 号線公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2009 年 6 月発行
第 30 集	台渡里 2 —市道常磐 283 号線公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(台渡里第 51 次)—	2009 年 6 月発行
第 31 集	若林遺跡 (第 1 地点) —宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2009 年 8 月発行
第 32 集	堀遺跡 (第 16 地点) —市道渡里 48 号線公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (1) —	2009 年 10 月発行
第 33 集	堀遺跡 (第 18 地点) —市道渡里 31, 41 号線公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2009 年 11 月発行
第 34 集	堀遺跡 (第 17 地点) —市道渡里 35 号線公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2009 年 12 月発行
第 35 集	平成 19 年度水戸市内遺跡発掘調査報告書	2010 年 3 月発行
第 36 集	笠原水道 —第 6 次・10 次・11 次発掘調査報告書—	2010 年 3 月発行
第 37 集	台渡里 3 —平成 19 ～ 21 年度長者山地区範囲確認調査概報—	2011 年 1 月発行
第 38 集	台渡里 4 —宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (台渡里第 64 次) —	2011 年 1 月発行
第 39 集	堀遺跡 (第 3 地点第 2 次調査) —宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2011 年 1 月発行
<hr/>		
水戸城跡	三の丸土塁および堀の復旧に伴う工事・調査報告書	2006 年 9 月発行

水戸市埋蔵文化財調査報告第39集

堀遺跡

(第3地点第2次)

— 宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

印刷 平成23年1月31日

発行 平成23年1月31日

編集 株式会社東京航業研究所

発行 水戸市教育委員会

印刷 関東図書株式会社

〒336-0021

埼玉県さいたま市南区別所3-1-10

TEL 048-862-2901